

経営学における人間理解の一局面

——レスリスバーガーとメイヨウ、そしてジャネ——

杉 山 三七男

- I 緒言
- II メイヨウと苦悩するレスリスバーガー
- III ジャネとメイヨウ、レスリスバーガー
- IV ジャネ理論の理解
- V 強迫症と「誤った二分法」
- VI 結言

I. 緒言

初期人間関係論 (Human Relations) の中心人物の一人、フリッツ・レスリスバーガー (Fritz J. Roethlisberger, 1898~1974) は、1968年に、自分の研究生生活を回顧して論文集 *Man-in-Organization*¹⁾ を公にしている。この論文集は、基本的には、1941年に出版した最初の論文集 *Management and Morale*²⁾ 以後の論文を、執筆当時を回顧する内容の頭注を添え、年代順に掲載したものである。しかし、その巻頭の第1章は、“The Nature of Obsessive Thinking”と題された1928年の論文(以後、論文“Obsessive Thinking”と記す)³⁾で、彼が、師にあたるエルトン・メイヨウ (G. Elton Mayo) の指導のもとで研究活動をはじめて最初に書いたものであった。その当時レスリスバーガーは、メイヨウの影響のもとで、学生に対してカウンセリング (counseling) を行っていたのであるが、この論文は、その活動の成果である。

では、なぜこの論文が、彼の最後の論文集の最初に掲載されたのだろうか。第一章の頭注で彼は、その理由を、「この一篇は、組織や管理

の問題に直接関係するものではないが、その主要なテーマが、『強迫的思考 (obsessive thought)』の現れとしての『誤った二分法 (false dichotomy)』に関係するもので、この種の思考方法が、学生に限らず大学の教授やビジネスマンをも悩ませていることに気づいて以来、私の多くの論文に現れていることからここに含めることにする⁴⁾』と述べている。事実、たとえばこの論文集の第5章、1948年に書かれた論文“The Secret of Success”の頭注において、彼は、「年代順にみればここに位置するが、これは、論理的には、強迫的思考方法に関する第1章での私のアイデアを拡張したものである⁵⁾』と述べ、それが、最初の論文と直接関係していることを認めている。また、1954年に書かれた論文“Learning in and Training for a Multidimensional World”では、「礼賛主義 (cultism)』と形を変え、その展開が示されている⁶⁾。このように、彼の研究生生活の最初の段階で追求された心理学的な問題は、単に初期のものであっただけでなく、その後の彼の研究の基礎をなすものでもあった。

しかし、学説史的立場からみれば、人間関係論に関する一般的な理解は、それが、経済的欲求に従って動機づけられる人間に代わって社会的欲求に従って動機づけられる人間を提示した、という形で整理されるものである⁷⁾。そして、こうした理解に基づき、人間関係論は、経営学の発展過程で、合理性を追求した科学的管理法 (Scientific Management) に取って代わって人間性を追求する方向を示したもの、として評価されている⁸⁾。しかしまた、その一方で、たとえばそうした評価の範囲内に押し込められてしまい、すでに過去のものとしてされてしまった感もある。もちろん、経営学の発展を学説史的に概観するためには、この種の整理した物の見方も必要であろう。しかし、整理も過度に進めば、そのものの本来の姿を台無しにしてしまうように思われてならない。たとえば人間関係論は、本当に、社会的欲求に従って動機づけられる人間、という人間観に基づいていたのであろうか、あるいはまた、そのような人間観

を提示しようとしていたのであろうか。この一般的理解と最初に示したレスリスバーガーの論文“Obsessive Thinking”の主題との間には、あまりにも隔たりがあり、両者を直接結び付けて論じることは困難であろう。それでは、もし一般的な理解と異なるのであれば、人間関係論は、実際にはどのような人間観に立脚していたのであろうか。そしてそれは、一般的な理解とどのような関わりを持っているのであろうか。人間関係論をより適切に理解するためにも、また、それを学説史上に適切な形で位置づけるためにも、こうした疑問に答えておく必要があるように思われる。

このようなことから、ここでは、学説史的な整理を目的とはしていない。それとは反対に、レスリスバーガーとメイヨウに焦点を当て、人間関係論の形成過程をその背景から考察することを通して、それが持つ本来の人間理解のあり方をより広い視野から探求することにする。そして、これを出発点とし、今後は、主にレスリスバーガーの人間関係論に注目して、さらに研究を積み重ねて行きたいと思っている。人間関係論の一般的な理解との関係に関しては、これらの作業を経た上で検討がなされるべきではなかろうか。

こうした意図と方針のもとに、ここではまず、レスリスバーガーの研究活動の出発点であり、またその後の彼の研究の基礎を示すものと思われる、すでに言及してきた論文“Obsessive Thinking”を手がかりとし、その背後にある心理学的立場を明らかにすることによって、人間関係論の基本的な人間理解のあり方を明らかにして行く。その場合、もちろん、この論文に関連する学問的な背景が問題になることは当然である。この点に関しては、師のメイヨウが果たした役割は大きく、ここで示す人間の理解も、正確にはメイヨウのものと言うべきかも知れない。しかし、レスリスバーガーがそれを踏まえていたことも確かであり、それ故、両者共通の理解として考えることにする。さらに、レスリスバーガーの人間関係論に関する研究を意図している以上、こうした学問的背景や活動

が、彼にとってどのような意味を持っていたのかを調べておくことも必要なように思われる。なぜなら、人と理論は本来切り離されるべきものではなく、人間関係論という特定の領域に彼が傾倒して行くことになったのも、多くは、彼がそれらに与えた意味付けのあり方に依存しているからである。これらの点を理解するに当たっては、彼自身の経歴やハーバード大学という環境、彼とホーソン調査との関係、さらには彼と師メイヨウとの関係やメイヨウの学問的背景などが重要な位置を占めることになる⁹⁾。そこで以下、これらの点を考慮しながら、人間関係論の基本的な人間理解のあり方を追求して行くことにする。

注

- 1) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization: Essays of F. J. Roethlisberger*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1968.
- 2) Ditto., *Management and Morale*, Harvard University Press, 1941 (野田一夫、川村欣也訳『経営と勤労意欲』ダイヤモンド社、1969年)。この著作は、キャボット (Philip Cabot) の主催する経営者討論会 (Executive Discussion Groupes) で報告したものを基礎として、レスリスバーガーが新たに3章を書き加えて出版した論文集である。
- 3) 一応、これを「論文」と称しておくが、本来は「資料」というべきであろう。論文集に掲載される以前は、ハーバード・ビジネス・スクールで「資料」として扱われていたものである。ただし、人間関係論の立場からすれば、資料だからといって必ずしも価値が下がるものではない。逆にそれは、根拠が希薄ですぐに廃れてしまうような机上の空論や意見の表明としての論文とは違って、長期にわたって意味を持ち続ける場合もある。
- 4) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 1.
- 5) *Ibid.*, p. 85.
- 6) cf. *Ibid.*, pp. 196-216. レスリスバーガーは、特定の理論だけが正しいと思ったり、論理一貫性を追求しなければならないとするのは、学者の強迫観念だと

考えている。その立場に立ち、この論文では、特定の理論を礼賛することが、学習と成長の障害となることが示されている。

- 7) ここでは、シェイン (Edgar H. Schein) の分類に従った表現方法を取っている。たとえば人間関係論に対する批判者の多くも、表現方法は異なるものの、基本的にはこれと同様の形で人間関係論を理解し、その理解を前提として人間関係論を批判しているのであった。ただし、批判のほとんどはメイヨウの著作に向けられたものであって、レスリスバーガーの著作に向けられたものではなかった。cf. Schein, E. H., *Organizational Psychology*, Prentice-Hall, Inc., 1965 (松井賚夫訳『組織心理学』岩波書店、1966年)。なお、人間関係論に対する批判は、次の著作に整理されて検討が加えられている。Landsberger, Henry A., *Hawthorne Revisited*, New York State School of Industrial and Labor Relations, 1958.
- 8) たとえばメリル (Harwood F. Merrill) は、アメリカ経営協会の協力のもとに経営学の古典から抜粋し一冊の本を編纂しているが、その最後に、人間関係論に関連して、メイヨウの著作からの抜粋を載せている。cf. Merrill, H. F., *Classics in Management*, American Management Association, Inc., 1960 (上野一郎監督訳『経営思想変遷史』産業能率短期大学出版部、1968年)。
- 9) 以後、レスリスバーガーの経歴や彼の目からみた状況認識に関しては、細部にわたって言及しないが、基本的にはレスリスバーガーの自伝、特にその第一部「キャリアの選択——1898年から1942年まで——」に従っている。cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena: An Autobiographical Account of My Work in the Field of Organizational Behavior at the Harvard Business School*, Harvard University Press, 1977, pp. 9-102.

II. メイヨウと苦悩するレスリスバーガー

人間関係論が産声をあげた頃の1927年当時、29歳になろうとしていたレスリスバーガーは、ハーバード大学の哲学研究科の大学院生であった。

それ以前をしてみると、子供の頃に彼は、土木技師になることを家族に公言していた¹⁾。しかしそれは、本当に技師になりたかったというよりも、不可解な大人の世界から逃げ出し、より明確で確実な世界へ行きたいと思っていたからではなかったか。親戚の集まりで興奮する大人を見て、彼は、違和感のみならず恐怖感さえ感じていた。それよりも、学校の勉強の方がよかったようである²⁾。いずれにしても彼は、この技師になることを目的として、1917年にコロンビア大学に入学し、鉱学、工学、化学などを勉強する。

ところが彼は、コロンビア大学に関しては、最後の一年に履修しなければならない授業を夏期講座で充当し、1920年からMITに入学して管理工学 (Engineering Administration) を学ぶことにしてしまった。この管理工学は、工学と経済学の結合を試みたもので、実際には科学的管理法であった。MITに行くことにした理由は、それが、キャリアの関心からみてコロンビア大学の授業よりもよく思われたからである。しかし、その科学的管理法は、逆に、彼を失望させる内容でしかなかった³⁾。そうした失望の中で彼は、アダム・スミスやリカードよりも、マルクス、ヴェブレン、アプトン・シンクレアといった社会主義的な色彩の強い人物の著作を熱心に読んだという。この逸脱傾向は、すでにコロンビア大学に在籍しているころから見られた。というよりも、その段階で工学に関心を持つことができなくなってしまったため、MITに行くことにしたというべきであろう⁴⁾。コロンビアで彼が関心をもったのは、工学ではなく、近代文明、哲学、比較文学の授業であった。

このように関心が移行していたにもかかわらず、1922年に彼は、初期の目的とは若干異なるものの、一応予定通りに、テキサス州エル・パソにあるアメリカン・スメルティング・アンド・リファイニング社で化学技師として働くこととなる。しかし、そこでの彼は、スキル (skill) 豊かな先輩の仕事ぶりに感心する一方で、自分自身にはそのスキルが欠けており、挫折感を味わうことになってしまった⁵⁾。そして、会社のある

禁酒法下のアメリカから隣町のメキシコのファレスに出て、酒を呑んで憂さ晴しをしていたという。結局、しばらくして彼は、そこを退職してしまった。その後、アメリカン・ブック・カンパニーの本の販売通信員をしながら、読書にふけったりしていた。特に現代アメリカ文学が、自分とその家族によく似た境遇を描いており、感情に訴えるものをもっていったようである。そして彼は、その読書を通して、現代社会の病弊と個人的来歴 (personal past) を自分の問題として認識できるようになって行く。彼は、当時のこうした自分を、「ボヘミアン」と称している⁶⁾。しかし、キャリア上これではやって行けない。そこで、これら全ての物事の基盤にあるもっと確固としたものをアカデミックな世界に求めて彼は、1924年に、ハーバード大学の哲学研究科にやってきた。

ハーバード大学に入り、最初彼は、ラッセル (Bertrand Russell) とともに新たな分析哲学の基礎となる数理論理学の書 *Principia Mathematica* を著したイギリス人哲学者のホワイトヘッド (Alfred N. Whitehead)⁷⁾ に師事していた。以前工学を目指して勉強していたレスリスバーガーにとって、算数の基礎を集合論で再構築しようとするこのホワイトヘッドの授業は、たとえば神の存在の形而上学的な証拠を問題にするような授業が多くある中で、はるかに親しみやすいものであったようである。彼は、その授業について、「この論理的な厳格さは、一陣の新鮮な風のようにであった。背筋の凍る思いもしたけれど、虜になってしまった⁸⁾」と述べている。しかし、当時のレスリスバーガーは、算数以上に基礎を再構築する必要がある心理状況にあった。そのため、集合論より以上に確固としたものが欲しかったのである。その一方で、「背筋の凍る思い」と言っているように、実のところレスリスバーガーは、ホワイトヘッドの厳格さに圧倒されていたのではなかろうか。結局彼は、自分自身でも訳がわからないうちに、最終的には、フランス人の中世哲学の専門家で客員教授のジルソン (Etienne Gilson) の指導のもと、デカルトに関する研究をすることに決めてしまった⁹⁾。しかし、この研究

も大変な仕事である。彼は、図書館にあるデカルトに関連した膨大な資料を前にし、ただ当惑するばかりであった。これが、1927年当時に彼が置かれていた状況とってよい。

その頃、医学部長のウォーセスター博士 (Alfred Worcester) は、当時ホステス・ハウスと呼ばれていた (後にライマン・ハウスと呼ばれるようになる) 施設に、専属の男性スタッフが必要だと考えていた。レスリスバーガーは、春にその専属に選ばれて、その後マーガレット・ディクソン (Margaret Dixon) と結婚する1929年までそこに住み込むことになる。仕事は、最初は精神病学者のショウ (Clifford Shaw) の指導のもと、医学的には解決できない問題を抱えた学生に対して「面接 (interviewing)」をすることであった。もちろんそれが、ロジャーズ (Carl R. Rogers) の研究によって「カウンセリング」という名称で呼ばれるようになって行く活動の一つの出発点であり¹⁰⁾、ホステス・ハウスは、大学における最初のカウンセリング・ルームとってよかろう。このホステス・ハウスで仕事を始めてから、誰かが、困惑しているレスリスバーガーに、その前年の26年にペンシルバニア大学からハーバード大学のビジネス・スクールに来たばかりの、オーストラリア人エルトン・メイヨウに会ってみるよう勧めた。レスリスバーガーは、勧められた人が誰であったのかをはっきり覚えておらず、ただ「誰か」としていただいであるが、それは、彼が前に師事していた哲学者のホワイトヘッドであったようである¹¹⁾。

メイヨウは、その経歴からって精神病理学者であった。そして、ヒステリー症の一種「戦闘恐怖症 (shell shock)」に関する研究で、当時すでに世界的に知られていた。レスリスバーガーは、そのメイヨウに会って、自分の置かれている苦境や問題意識などを話した。彼によれば、その時のメイヨウは、彼に強い関心を示し、何か楽しんでいるかのようであったという。そのメイヨウは、レスリスバーガーに、彼自身が避けたいと思っていることにも注意を向けさせた。結局それは、後に彼が、

メイヨウの指導のもとで行うことになるカウンセリングだったのであり、その時彼は、自らそれを受けていたのである。その過程を通して、レスリスバーガーは、子供の頃から無意味だと思って逃避してきた大人の世界に関心を持つことができるようになった。この頃の自分について、彼は、「新たなフリッツが生まれた¹²⁾」とさえ言っているほどだ。物事が思うように進まず、このような対応を受けたこともなかったレスリスバーガーは、最初、このメイヨウに当惑していた。ところが、2回目に会ったときにメイヨウは、彼に職まで与えてくれたのである。結局彼は、その9月に、哲学の博士号を手にする事なく、インストラクターとしてハーバード・ビジネス・スクールに勤めることになる。

レスリスバーガーは、勤め始めたころについて、「その後数年間、私はメイヨウの弟子であったのであり、彼の博学さ、知的創造力や臨床的洞察力に魅せられていた¹³⁾」と回顧している。そして、「われわれは、たとえばジャネ (Pierre Janet)、フロイト (Sigmund Freud)、ユング (C.G. Jung)、アドラー (Alfred Adler)、ピアジェ (Jean Piaget)、デュルケイム (Émile Durkheim) と言った人々の本を数多く一緒に読んだ¹⁴⁾」と語る。このような関係から、彼の「面接」活動に関しても、ショウからメイヨウへと指導者が代わることになる。そして、このメイヨウの指導のもとで行った「面接」活動の成果が、最初に示した論文なのである。

レスリスバーガーは、その成果と経験をホーソン調査に活かすことになる。この有名なウエスタン・エレクトリック社のホーソン工場での調査は、一般にはハーバード大学のメイヨウ・グループが行ったように考えられているが、彼らは、はじめからそれに関与していたわけではない。最初の「照明実験」は、MITの電気工学部長であったジャクソン (D. C. Jackson)の指導のもとで、1924年から始められていた。その後1927年から、ウエスタン・エレクトリック社は、独自に「リレー組立作業検査室」の研究を企画し実行に移している。続いて、1928年からは「面

接計画」も始めた。その1928年には、MITの生物学と公衆衛生学のターナー(C. E. Turner) がコンサルタントとして加わっている。

レスリスバーガーによれば、メイヨウ・グループがこの調査と関係を持つようになったのは、1928年の9月頃からであったとのことだ¹⁵⁾。確かにその頃、メイヨウは、コロラドへ調査に行った帰りにホーソン工場に立ち寄っている¹⁶⁾。しかし、それよりかなり前の3月の段階で、すでに、彼の所にウエスタン・エレクトリック社から「リレー組立作業検査室」の資料が送られてきており、彼には、それに関するコメントも求められていた¹⁷⁾。その後も、メイヨウとウエスタン・エレクトリック社との間にはかなりのコンタクトがあった。

メイヨウ・グループが直接ホーソン調査に関与するようになったのは、1929年の7月からといえよう。つまりその時、メイヨウの指示によって、「面接計画」の方法が「指示的面接 (directive interviewing)」から「非指示的面接 (non-directive interviewing)」に変更されることになり、メイヨウ・グループは、そのために、新たに面接者を訓練する仕事を担当することになったのである¹⁸⁾。この非指示的面接による「面接計画」は、メイヨウ・グループもそれ自体に加わって翌年の1月から実施され、また一般に知られているホーソン調査以後も、会社主体で長く続けられて行く。途中、名称が「カウンセリング」と変更されることとなり、1966年には、その成果も公にされている¹⁹⁾。その一方で、1931年からは、このグループの指導のもとで「バンク巻線観察室」の研究が始められた。そして、1932年9月になると、それまでの研究資料がハーバード大学のビジネス・スクールに持ち込まれ、整理が始まった。それらを取りまとめた報告書が、*Management and the Worker* である。これは、結論部分を除いて1936年までに完成されている。そして、経営者側に回覧された後、1939年に結論部分が付け加えられ、レスリスバーガーとウエスタン・エレクトリック社のディクソン (William J. Dickson) の共著として出版されることになる²⁰⁾。

これまでの考察から、レスリスバーガーの立場に立って見た場合、時間的経緯から考えても、彼のホーソン調査への参加は、当時学生に対して行っていた「面接」活動の成果や経験を産業上の問題に応用する機会であったといえる。それ故その調査は、メイヨウの指導から得たものを実際に活用する場でもあった。そこで、報告書である *Management and the Worker* を見てみると、第13章「面接方法」の脚注には、メイヨウとレスリスバーガーがその著作と一緒に読んだとして先に名前を示した P. ジャネ、S. フロイト、C. G. ユンク、J. ピアジェなどの心理学者の名前が、その著作名と共にあげられている²¹⁾。レスリスバーガーは、これらの心理学者の著作から多大な影響を受けたのであろう。

注

- 1) フリッツ・レスリスバーガーの父は、スイスの実家が製造しているチーズの販売を手伝うためにアメリカにやってきた。しかし、彼が6歳の時に他界してしまった。その関係から、義父のもとで生活するフリッツの家の経済状態を心配して、叔父は、彼と姉の学費を出してくれたりしていた。そして14歳の時に、その叔父は、いくつかの条件のもとにチーズの仕事に就くように彼に勧められた。しかし彼は、家族会議の場でそれを断り、土木技師になりたいと公言したのである。cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 14.
- 2) レスリスバーガーは、「青年時代を過ごしたこの『非科学的』な家族の雰囲気の中で、私にとって、学業こそこのナンセンス全てからの逃げ道であった。」とさえ述べている。 *Ibid.*, p. 16.
- 3) MITでの教育は、全く人間性を無視したものであったようだ。その点を象徴するものとしてレスリスバーガーは、ある教授が「トイレは、夏暑く、冬寒くしておけ。そうすれば従業員は、そこにたむろすることはない」ということをあげている。 *Ibid.*, p. 21. この言葉は、レスリスバーガーがよく引合いに出していたものらしく、彼を追悼するパネル・ディスカッションで、後輩のロンバードもその点に言及している。Lombard, George F. F. (ed.), *The*

Contributions of F. J. Roethlisberger to Management Theory and Practice, Harvard University Graduate School of Business, 1976 (杉山三七男訳「マネジメント理論と実践に対するフリッツ J. レスリスバーガーの貢献——パネル・ディスカッション——I」専修大学北海道短期大学紀要、第21号、1988年とそのII、同紀要、第22号、1989年) 中のロンバードによる「序」の部分参照。このロンバードが編集した刊行物は、基本的にパネル・ディスカッションで報告されたものである。

- 4) レスリスバーガーは、「私は、自分の工学系の資質に疑いを抱き始めていたのかもしれない。コロンビア大学では、学問的にはよくいっていなかった。つまり、自分の望んでいたほどにはいかなかったのである」と述べる一方で、次第に経済学に関心を持つようになっていったとしている。cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 20.
- 5) レスリスバーガーの具体的な仕事は、鉱石中の金属の含有量を調べることであった。その時彼の先輩は、溶鉱炉の炎の色を見るだけでその温度を判断することができた。これが、後に問題になるスキルである。しかし、レスリスバーガーには、そのスキルが身につけていなかった。そこで彼は、この仕事が自分に適していないのではないかと考えるようになってしまった。cf. *Ibid.*, pp. 22-23.
- 6) cf. *Ibid.*, p. 23.
- 7) Whitehead, A. N., and B. Russell, *Principia Mathematica*, Cambridge University Press. この著作は、1910年から13年にかけて公にされた全三巻にわたる大著である。両者は、その執筆の途中で考え方の違いに気づき、その後かなり異なった哲学を打ち立てることになる。
- 8) Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 25.
- 9) cf. *Ibid.*, p. 26.
- 10) レン (Daniel A. Wren) は、ロジャーズの研究がレスリスバーガーのテーマに従ったものだとしている。cf. Lombard, G. F. F. (ed.), *op. cit.* (邦訳II、121頁)。また、*Man-in-Organization* に掲載されているレスリスバーガーの論文

“Barriers to Communication between Men”は、1951年にノースウエスタン大学の「コミュニケーション」を議題にした百周年記念会議のパネル・ディスカッションで報告されたものであるが、52年には、*Harvard Business Review* に掲載されている。その時は、ロジャーズの論文とセットで、“Barriers and Gateways to Communication”という表題が付けられていた。ただし、ロジャーズによって受け継がれて行くことになるのは、その後メイヨウの指導のもとに行われるようになる面接であって、この時点のものではない。

- 11) cf. Trahair, Richard C. S., *The Humanist Temper: The Life and Work of Elton Mayo*, Transaction, Inc., 1984, p. 200.
- 12) cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 27.
- 13) *Ibid.*, p. 29.
- 14) *Ibid.*, p. 30.
- 15) レスリスバーガーは、実際には「リレー組立作業検査室」の第12期の実験段階の頃としている。cf. *Ibid.*, pp. 46-47.
- 16) cf. Trahair, R. C. S., *op. cit.*, p. 230.
- 17) cf. *Ibid.*, p. 229.
- 18) cf. *Ibid.*, p. 231.
- 19) この成果は、Dickson, W. J., and F. J. Roethlisberger, *Counseling in an Organization*, Division of Research, Harvard Business School、として公にされることになる。
- 20) Roethlisberger, F. J., and W. J. Dickson, *Management and the Worker: An Account of a Research Program Conducted by the Western Electric Company, Hawthorne Works, Chicago*, Harvard University Press, 1939.
- 21) cf. *Ibid.*, p. 272.

III. ジャネとメイヨウ、レスリスバーガー

これまで見てきたように、レスリスバーガーは、学生に対するカウン

セリングから研究活動を始めている。そして、その後5年間、ほとんどの時間をそれに費やしていたという。この、メイヨウのもとで行われたカウンセリング活動の最初の約一年間の成果をまとめたものが、論文“Obsessive Thinking”であった。これを書き上げる段階で、すでに多くの心理学者の影響を受けていたのかも知れないが、この論文に関して見る限り、彼に大きく影響を与えた研究者は、ジャネとメイヨウの二人であった。論文の頭注で彼は、その点に関して「読者は、この論文の中で、私の思考にピエール・ジャネとエルトン・メイヨウから多大な影響があったことが分かるであろう¹⁾」と述べている。

ジャネは、フランスの心理学者であり、精神分析で有名なスイスの心理学者フロイトと同時代に活躍していた²⁾。そして両者とも、フランスのサルペトリエール病院のシャルコー (Jean-Martin Charcot) の指導のもとで、神経症の患者に対して本格的な臨床研究を始めている。年齢的にはフロイトの方が三才ほど年上であるが、この研究に関してはジャネの方が先行していた。そして、その過程で、両者は同様の現象に注目し、ジャネは「下意識 (subconscient)」という用語を、フロイトは「無意識 (unconscious)」という用語を提唱することになる。このように、両者は、初期ほとんど同じ精神現象を見ていたのであるが、その後異なった方向へ進む。フロイトが、ヒステリー症の原因を分析的に追求し、結局それを性的な外傷体験に帰して行くようになったのに対し、ジャネは、そうした原因の可能性を認めながらも、意識による人格の統合に焦点を合わせようとして行くのである。これらの点に関連して、レスリスバーガーとよく似た環境のもとで研究活動を始めていた友人のホマンズ (George C. Homans)³⁾は、ジャネが、「フロイトが無秩序の原因論に関心を持っていた程には、その点に関心を持ってはいなかった⁴⁾」と述べている。研究方法から見ると、ジャネは、フロイトのような分析的な原因追求型の方法ではなく、臨床的観察に基づいて症状を記載するという記述的 (descriptive) な研究方法を基礎とし、その成果を分類して

総合的な体系にまとめ上げて行くといった、一種の博物学 (Natural History) 的研究スタイルをとっていた。この方法では、何よりもまず、対象を全体として把握することから始まる。ジャネとフロイトのその後の進展方向の違いも、こうした研究方法の違いと無関係ではあるまい。そして、このジャネの研究スタイルに近い記述的研究方法が、ホーソン調査を始めとしたその後の人間関係論の研究活動においても使用されることになる⁵⁾。

1927年当時のレスリスバーガーは、先に見たように、形而上学的に神の存在を追求しようとする哲学に対して嫌気がさしていた。その彼の目から見ると、フロイトは、経験的現象から離れた形而上学的存在を扱っているように思われてならない。そこで彼は、「ジャネの概念の方がフロイトのものよりも性分にあっている⁶⁾」と感じるようになった。何か確固としたものを求めていた彼にとって、人の偏見や強迫観念は、確かに目の前の学生の言葉の中に存在するが、過去の性的外傷体験はあまり語られることもなく、たとえ語られたとしてもそれほど確かなものではない。加えて、フロイト流の強引に原因を追求して行く方法は、人の心を傷つけるものであり、学生に対するカウンセリングの場で使用することは困難であった。そこで、カウンセリングを行う場合に彼は、「まず、今ここで (here and now) 学生のもつ偏見の特徴に注目し、ただ必要だと思った場合にのみ、その人の現在の方向性に何が影響しているのかを知るため、彼の個人的来歴を探ることにした⁷⁾」のである。このようにレスリスバーガーは、基本的にはフロイトのアイディアを認めているものの、自らが置かれている環境と自分自身の志向性に基づいて、彼よりもジャネの方により一層傾倒して行くことになった。

この過程で、レスリスバーガーは、師にあたるメイヨウの指導とジャネの著作から多くの影響を受けることになる。そこで、もちろん、彼に対するメイヨウの影響とジャネの影響を区別して考えることもできるであろう。しかし、レスリスバーガーの立場から見た場合、ここでのテー

マに関する限り、両者の影響を明確に区別することは困難なように思われる。

メイヨウは、1948年になってからではあるが、ジャネの心理学に関する研究ノート *Some Notes on the Psychology of Pierre Janet* (以後、*Psychology of Pierre Janet* と記す) を公にしている⁸⁾。結局これが、彼の最後の著作となるのであるが、その最初の部分には、前年の47年に他界したジャネに対する追悼の言葉が載せられている。文章は短いですが、そこにおいて彼は、ジャネとの交際や共同研究を企画したことなどに言及し、両者の関係が深かったことを窺わせている。それに先立つ1933年には、彼の三部作の一つ *The Human Problems of an Industrial Civilization* が出版されているが、その第5章「『モラル』の意味」では、主としてジャネの理論が扱われている⁹⁾。さらに遡ると、1920年頃にオーストラリアで行った講義の段階で、すでにメイヨウは、ジャネを射程に入れた話をしている¹⁰⁾。1925年には、その時点でアメリカに渡っていたのであるが、彼は、フランス政府により交換教授としてメキシコに派遣されていたジャネをフィラデルフィアに招待し、彼に講演をしてもらっている¹¹⁾。そしてその年には、ここで主題となっている概念を使用した“The Great Obsession”も公にしている¹²⁾。

このようなことから、レスリスバーガーがメイヨウと一緒にジャネの著作を読んだといっても、その段階でメイヨウは、すでにジャネの理論をよく理解していたはずである。それ故レスリスバーガーは、むしろメイヨウを介して、あるいはメイヨウの理解するジャネの理論を学んだというべきではなかろうか。そのため、ジャネ理論の理解について考えてみると、メイヨウとレスリスバーガーの立場を明確に区別することは困難なように思われる。同様にまた、レスリスバーガーに対するジャネの影響とメイヨウの影響を区別することも困難であろう。そこで以下、ジャネの理論に関するメイヨウとレスリスバーガーの理解を明確には区別しない曖昧な立場から、彼らがジャネの理論をどのように見ていたのか

を検討することにする。そして、そのことを通して、彼らの基本的な人間理解のあり方を明らかにしたいと思っている。その場合、特にメイヨウの著作 *Psychology of Pierre Janet* が有益であるので、ここでは、主にそれを参考にして検討を進めて行く。このような立場と方法をとることから、本来はレスリスバーガーの人間関係論の研究を意図しているものの、ここでの検討自体は、彼の人間関係論にとどまらず、メイヨウを中心とした初期人間関係論の持つ基本的な人間理解を明らかにするものといってもよからう。

注

- 1) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 1.
- 2) なお、ジャネおよびフロイトに関しては、次の邦訳書も参考にした。P. ジャネ著、松本雅彦訳『心理学的医学』みすず書房、1981年 (*La Médecine Psychologique*, Ernest Flammarion, 1923)、H. F. エレンベルガー (Henri F. Ellenberger) 著、木村敏・中井久夫監訳『無意識の発見——力動精神医学発達史——』弘文堂、1980年 (*The Discovery of the Unconscious*, Basic Books, Inc., 1970)。
- 3) レスリスバーガーの弟子にあたる A. ザレズニク (Abraham Zaleznik) は、すでに注で引用してきている R. C. S. Trahair の著したメイヨウの伝記に「序」を寄せて、レスリスバーガーとホマンズの二人が、継承した部分は異なるものの、メイヨウの後継者であることを示している。cf. “Foreword: The Promise of Elton Mayo” in Trahair, R. C. S., *op. cit.*, pp. 1-13.
- 4) Homans, G. C., *Coming to My Senses: The Autobiography of a Sociologist*, Transaction, Inc., p. 142. またレスリスバーガーは、「彼 (メイヨウ) が、ジャネは現象をよりよく記述していたが、その一方でフロイトは、それらの歴史的決定要因を示していると感じていた」と述べている。Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 38.
- 5) レスリスバーガーは、自伝の第10章を “Toward a Descriptive Theory of Behavior in Organizations” と題し、1938年から48年の研究生生活を始めた初期の

- 段階で、よりよい人間行動の記述のあり方を求めて記述理論を展開していたことを示している。cf. *Ibid.*, pp. 143-167.
- 6) *Ibid.*, p. 38.
- 7) *Idem.*
- 8) Mayo, G. E., *Some Notes on the Psychology of Pierre Janet*, Harvard University Press, 1948.
- 9) cf. Mayo, G. E., *The Human Problems of an Industrial Civilization*, The Macmillan Co., 1933 (村本栄一訳『新訳 産業文明における人間問題』日本能率協会、1967年、105-129頁)。
- 10) cf. Trahair, R. C. S., *op. cit.*, p. 121. メイヨウは、異常心理学に関する連続講義をし、第四講義においてジャネのヒステリー症の理論を扱っている。
- 11) cf. *Ibid.*, p. 189.
- 12) Mayo, G. E., "The Great Obsession." in *Bulletin of the Taylor Society*. October, 1925, pp. 220-225.

IV. ジャネ理論の理解

メイヨウとレスリスバーガーと一緒に読んだというジャネの著作は、論文“Obsessive Thinking”と *Management and the Worker* の脚注に示された引用先からも明らかなように、実際は小冊子の *Les Névroses*¹⁾ であったとってよかろう。レスリスバーガーはまた、*Management and the Worker* において *Les Obsessions et la Psychasthénie* (以後、*Les Obsessions* と記す)²⁾ と題した著作もあげているが、この二巻合わせて1300頁ほどにもなる大著も、一緒に読んだのかも知れない。前者の *Les Névroses* は、後者を含め、ジャネが1910年頃までの自分の研究をまとめたもので、神経症の中のヒステリー症 (hystérie) と精神衰弱 (psychasthénie) を比較検討する形式をとって書かれている。そこで示されている両者の違いは、基本的には、人格の解離現象を伴うか否か

とってよいであろう。すなわち、ヒステリー症には大なり小なり二重人格に見られるような人格的解離現象が現れるが、精神衰弱にはそれがない。

レスリスバーガーにとって、重要なのは精神衰弱の方であった。なぜなら、ホステス・ハウスに送られて来る人々の多くは、この精神衰弱になっている強迫症者とか「悩む」タイプの学生であったからである。彼らには、「意識の全領域において、『分裂』、『萎縮』、あるいは『亀裂』など何もない³⁾。」その意味で彼らは、別に人格的な病になってはおらず、異常な人物でもない。それに、送られて来る人のほとんどがハーバード大学の学生かあるいは大学院生であり、知的にはかなり優秀な人々のように思われる。事実、彼らの多くは、自分自身が「他の人々よりもかなり優れていると感じている⁴⁾」ほどであった。ただ、精神的に機能低下を起こしているだけである。そこでレスリスバーガーは、「われわれは、強迫症者を基本的には正常な人間と見ている⁵⁾」と発言することになる。実際、彼が何度となくカウンセリングをしていた退学寸前の学生が、最終的に、ハーバード大学を抜群の成績で卒業するということがあったほどだ。そのことを知ったビジネス・スクールの学部長ドーナム (Wallace B. Donham) は、この活動に何か重要な意味があるのではないかと気づきはじめる⁶⁾。また、カウンセリング活動が評価されてレスリスバーガーは昇進し⁷⁾、その後その活動自体、ハーバード大学の正規の活動になって行く。先に述べたように、これが今日では常識となっている、大学におけるカウンセリング・ルームのはじまりである。

この精神衰弱に関して、レスリスバーガーは、論文“Obsessive Thinking”の中で、ジャネの *Les Névroses* からそれを要約した部分を引用している。つまり「精神衰弱とは、心理学的緊張の低下、実在に対して行動し実在を認識することを可能にする機能の減退、それに代わる懐疑、動揺、苦悩といった形での劣悪で誇張された活動の代用、そして以前の苦難を表現し同じ特性を持つものからそれらを想像させるような

強迫化した観念によって特徴づけられる、精神的抑鬱の一形態である⁸⁾。」さらに彼は、この引用部分に関連して、「直接の環境に関する知覚、あるいはその環境に基礎を置いて行動する能力の減退」でジャネが示そうとしていたのは、「直接的な周囲の状況の一点に注意を向け、そして傾注 (attention) し続ける能力の低下である」と続けている⁹⁾。レスリスバーガーの論文の基本的な主題は、この能力が低下した場合に見られる強迫化した観念にかかわるものであった。

ところで、この精神衰弱の定義にも明らかなように、ジャネの人間理解については、心理学的緊張 (la tension psychologique)、実在機能 (la fonction du réel)、そして心理学的現象の階層 (la hiérarchie des phénomènes psychologiques) が想定されている。メイヨウとレスリスバーガーは、ジャネが示したこれらのものをどのように見ていたのだろうか。

この点を明らかにする前に、少し、1927年頃のハーバード大学の学問的な雰囲気を見ておくことにしよう。レスリスバーガーによれば、当時ハーバード大学では、科学方法論に関して生理学者のヘンダーソン (Lawrence J. Henderson) が強い影響力を持っていたという¹⁰⁾。彼は、後に同僚のキャノン (Walter B. Cannon) が「ホメオスタシス (homeostasis)」メカニズムという用語を用いて一般に知られるようになるものを¹¹⁾、すでに動物有機体の「中位恒常性 (neutrality regulation)」メカニズムと称し、関心を持つようになっていた¹²⁾。また、先に言及した哲学者ホワイトヘッドをイギリスから呼んだのも、このヘンダーソンである。ホワイトヘッドは、その頃、彼独特の「有機体の哲学」を完成させるところであった¹³⁾。彼は、これより前、アメリカに来てすぐの1925年に、名著 *Science and the Modern World* を公にしている¹⁴⁾。折しもそれを執筆している最中、レスリスバーガーは、まさに彼の弟子であった。そしてその後、ハーバード大学では、ホワイトヘッドがその著作で示した「具体者置き違いの誤謬 (fallacy of misplaced

concreteness) 」という言葉が使用されるようになる¹⁵⁾。それが意味するのは、抽象的なものをあたかも具体的なものであるかのように勘違いしてしまうことであるが、その言葉が使用されていたということは、ハーバード大学に、意見や論理よりも「事実 (fact) 」に注目しようという雰囲気があったことを示すものといってよかろう。この段階でヘンダーソンは、産業問題に関してメイヨウと共同で研究をしていたが、彼らの基本的な立場は、「仕事に就いている人に関し、あり余るほど多くの意見がある一方で、事実はあまりにも少ない¹⁶⁾」というものであった。もちろん、この問題に対して、ヘンダーソンは生理学的立場から接近し、メイヨウは、人間-社会的立場から接近していた。

ヘンダーソンは、その当時、同時にイタリアの社会学者パレート (Vilfredo Pareto) に関心をもつようになり、多くの人を集めて「パレート・セミナー」を開催していた¹⁷⁾。そして、後に生理学者の立場から解釈したパレートの理論を、著作 *Pareto's General Sociology* の形で公にすることになる¹⁸⁾。社会主義の思想が勢力を拡大してくる中、彼は、パレートの擁護者として論争もしていたようだ¹⁹⁾。そしてその後、セミナーに参加したりして彼の影響を受けた人々が、アメリカの社会学界の中心人物になって行く。ヘンダーソンは、これらの論争や彼らを介して、そこに、パレートが示した「社会システム (social system) 」と「均衡 (equilibrium) 」の概念を導入したといつてよかろう。たとえば「均衡」は、社会学に踏み込む前に経済学を研究していたパレートの立場からみれば、経済学における均衡の概念の拡大解釈であったのかも知れないが、ヘンダーソンにすれば、「中位恒常性」メカニズムを示すものであり、生理学的立場から見ても納得の行くものであった。

こうした知的-人間的環境の中で、ヘンダーソンのアイディアは、メイヨウやレスリスバーガーにも受け入れられ、彼らに多大な影響を与えることになる。しかし、彼らの段階で見ると、これらの概念は、まだ明確に定義されているとはいえない²⁰⁾。というよりも、彼らにとっては、

厳格な論理体系の構築を目的として個々の概念を明確に定義することが重要なのではなく、それらの概念を調査研究の道具として使用することに関心があったというべきであろう。その場合には、概念は、むしろ明確に定義されていない方がよい。レスリスバーガーは、後にその立場を主張するかのようによく言う、「何か特定の領域における科学的な研究者は、理論をもって研究を始めるのであるが、それは、後になって彼が展開する理論とは全く異なるともいわれている。……時には、(調査のための)『概念的図式 (conceptual scheme)』という用語が前者を示すために用いられ、(説明の)『理論』という用語が後者を示すために用いられる。……調査研究が実り豊かであるためには、概念的図式は、それほど正確かつ明確であり過ぎてはいけないともいわれている。何故であろうか。それは、概念的図式の機能が、最初に観察され、次に説明されることになるものを説明することではなく、それに注意を払い続けることだからである²¹⁾」と。「システム」も、ここに示された概念的図式の一つであり、説明のための理論ではない。それは、調査研究にあたって、まとまった物事の全体を示すか、あるいはそこに注意を集中させるために使用されるものである。それに対して「均衡」は、その全体を構成する諸要素が、相互に関連し合って全体を維持し続けている状態や過程を示すか、あるいはそのことに注意を集中させるために使用されるものと考えてよかろう。その意味で、彼らにとって両者は、別物ではなく、同じ現象の異なる側面を示すものであったとあってよいのではないか。そして、これらを具体的に活用した実例が、ホーソン調査であった。中でも「バンク巻線観察室」の研究は、そのよい例である。

この人間関係論の代表的な研究成果で、特に注目された点は、それまで想定されていた「公式組織 (formal organization)」という行動パターン以外にも、人々の相互作用から自然発生的に生まれてくる「非公式組織 (informal organization)」という行動パターンが存在していると指摘したことであった²²⁾。このことから言えるように、こうした

概念的図式にと重要なのは、調査研究に使用した場合の「発見的価値 (heuristic value) 」なのである²³⁾。

メイヨウは、ホーソン調査をはじめとする自らの研究に、これらの概念を活用している。ところが彼は、社会を問題にする場合には「システム」の概念をしばしば用いているものの、人間に関しては、ほとんどそれを使用していない。有機体という用語は用いているが、システムは使っていないのである。確かに人間は、見るからにそれだけで全体と言える。そこで、それ以上指示対象を限定するためにシステムの概念を用いる必要がないのかもしれない。むしろ彼は、人間が健全であることを追求し、その心理的状況に接近するために「均衡」の概念を多く用いている。それは、彼が、精神的な均衡を維持できずに苦悩する多くの人々を見てきた精神病理学者であったことにも由来するのであろう。いずれにしてもメイヨウは、この均衡に関連して、「周囲の状況に関するわれわれの意識的認知は、無数の知覚の間のバランスのとれた関係としてより他に言い表すことのできないような、非常に複雑な事実なのである²⁴⁾」との認識を示し、続いて、ジャネの次の言葉を引用している。つまり、われわれの精神生活は、「次から次へと現れ、一連の長い連鎖を形成している現象の連続から成り立っているだけでなく、……これらの連続した状態のそれぞれが、実際には複雑な状態にあるのである。それは、非常に多くの要素的事実を含んでおり、そしてそれが、外見上一つにまとまっているのは、これらの要素全ての統合によるだけではなく、それらの均衡にもよるのである²⁵⁾」と。これは、ジャネが三冊の著作でほぼ同じように述べている彼の基本的な人間理解である。メイヨウもまた、二冊の著作でこの部分を引用していることから²⁶⁾、彼にとっても、それが基本的な人間理解であったとあってよからう。ただし、ここに少し注意が必要である。先に引用したジャネの言葉は、メイヨウの英語訳に基づいたものであるが、その最後の部分に関してメイヨウは、ジャネがフランス語で「システム化 (systématisation) 」としているところを「均

衡」と意識している。もちろん、彼がその点を見抜いて意識しているのであって、当然、ジャネの記述している内容に均衡の観念を表すものが無いというわけではない。そうではなく、メイヨウの方が、そのことをより一層自覚して考えていたというべきであろう。

この点からも明かなように、メイヨウは、ジャネの主張や研究成果をそのままの形で受け入れていたわけではない。当時のハーバード大学の学問的傾向を反映し、それに基づいて理解しようとしたのである。そして彼は、さらに、ジャネの主張が他の研究者にも支持される内容のものであるとの立場に立ち、多くの人の研究成果を踏まえ、ジャネの理論を読み直している。この点を検討する手がかりとして、通勤列車に乗ろうとして急いでいる人の場合を、注意深い (attentive) 行為の事例として取り上げてみよう²⁷⁾。その人は、家を出るのがいつもより遅れてしまった。そこで、他の人に当たったり置いてある物につまづいたりしないようにしながら、駅に向かって急いで走る。途中で「どうしたのですか」と尋ねられ、「電車で遅れそうなので急いでいるのです」と応えながら腕時計を見る。何とか列車が来る前に駅に着き、ホームに立つが、疲れとめまいから少しふらふらし、吐き気も催している。

このケースは、誰もが経験したことのある日常的なもので、それ故非常に単純な現象のように思われるであろう。しかし、それを単純だと言うのは、われわれがそのように見ているからであって、それ自体は、非常に複雑な現象なのである。これらの行為には、少なくとも次の三つの活動がかかわっている。反射 (reflexes)、習慣的なスキル (habitual skills)、そして意識的な努力 (attentive effort) がそれだ。第一の反射は、筋肉、内臓や循環器系などからなる、有機体としての人間が起こす刺激に対する生物的な反射であり、パブロフの犬の唾液の例が示すように、時として、大脳皮質下で統制されて条件付けられている。しかしこの反射は、事例にもあるように、特別な場合には吐き気などの形で自覚されることがあるものの、通常は、ほとんど意識されることさえない。

こうした有機体の、意図せずとも自律的に機能している状況を指して、メイヨウは、ジャネが提示した「自動性 (l'automatisme)」の用語を借用し、一次的自動性 (primary automatisms) と呼ぶ²⁸⁾。

次の習慣的スキルは、特定の本能に由来し、初期の段階では反射と変わらないが、発達する大脳皮質の統制のもとで次第に獲得されて、二次的自動性 (secondary automatisms) を示してくる²⁹⁾。それが身につけば、一見ただけで状況に適切な意味を与え、それに基づいて応答して行くことが可能となる。ヘンダーソンの用語を用いれば、「直観的習熟 (intuitive familiarity)」ということにもなろうか³⁰⁾。たとえば走るという行為は、まさにスキルの賜といってよい。まだ立つことのできない赤ちゃんからすれば、非常に高度なスキルを必要とする行為なのである。ところが、駅に急いでいる人にとって、どのようにすれば走ることができるかなどということは問題にならないし、意識されることもない。このように、習慣的スキルは、それを身につけるまではかなり意識的な努力が必要となるが、一度身につけてしまえば、ほとんど意識されることのないものである。しかし、それによって人は、具体的な状況下でそれほどエネルギーを費やすこともなく、目的に向かって物事を遂行して行くことができるようになる。ところで、この場合に見られるような習慣的活動は、一般に考えられているような単純な繰り返しではない。「直面する多くの状況に対応した身についた統合的応答³¹⁾」なのである。それは、有機体全体としての複雑な応答であって、それによってわれわれは、さまざまな変化する状況に対して即座に対応して行くことができるということもできる。そしてこの種の活動は、現実に対して積極的に応答する過程を通して、より高度なものへと発達して行く。つまり、この習慣的スキルが身につけば、次には、それを前提としてわれわれは、より複雑な活動をすることも可能となるのである。その意味で、より自由になることができるともいえよう。いずれにしても、ここに示された反射や活動の全てが、バランスのとれた状態で秩序だって作用している場

合にのみ、われわれは、電車で遅れないように駅に急ぐという、一見したところ単純と思われるような複雑で注意深い行為を意識的に行うことができる。

ジャネと親交のあったジェイムズ (William James) は、ジャネのヒステリー症患者の「自動性」に関する研究を踏まえ、「経験的知識 (knowledge of acquaintance)」と「抽象的知識 (knowledge-about)」を区別している³²⁾。メイヨウは、ジェイムズのこの分類を受け入れ、先に示したスキルが、この経験的知識に対応するものと考えている。さらに彼は、ジャネが実在機能の対象を社会的実在と物質的実在とに区別しているのに対応する形で、技術的スキルと社会的スキルの二つを提示する。経験的知識、スキル、実在機能の関係をこのように位置づけた上で、メイヨウは、ジャネが自分と同様の立場に立っているものと考え、彼が、「意識的な努力というものは、反射、条件反射、そして獲得された習慣的スキルの支持なくしては不可能である³³⁾」と主張している、と理解している。

これまで述べてきた中に、ジャネが「心理学的現象の階層」と呼んだものが、メイヨウの解釈を受けた上で示されている。ジャネ自身は、それらを次の五つの階層に分けて示す。1) 無用な筋肉の動き (les mouvements musculaires inutiles)、2) 内臓の情動的反応 (les réactions émotionnelles viscérales)、3) 心象の機能 (les fonctions des images)、4) 無関心な活動 (l'activité désintéressée)、5) 実在機能がそれである³⁴⁾。

この階層的分類との対応で先の三つの活動を考えれば、「反射」や「条件反射」は、主に「無用な筋肉の動き」と「内臓の情動的反応」にかかわっていると見てよかろう。習慣的スキルは、ジャネがヒステリー症患者の観察から導き出してきた「無関心な活動」、その中でも特にそれ自体自動的な「習慣的行為 (l'action habituelle)」に当たるものと考えられる。これは、ジェイムズの示す「経験的知識」の問題であるが、

人が実在に対して適切に対応しようとする場合、「実在機能」と深くかかわってくる無くてはならないものである。後にみるように、メイヨウは、その欠落こそが問題だと考える。最後の「意識的努力」は、基本的に「実在機能」に対応するものと考えてよかろう。またジャネの示す階層から見た場合、「心象の機能」は、メイヨウの提示した三つの活動には直接の対応関係がない。それは、ジェイムズの示す「抽象的知識」の問題であり、メイヨウは、さらに詳しくそれを、「臨床的思考 (clinical thinking)」と「論理的思考 (logical thinking)」とに区別している。後に扱う強迫症者は、この階層に関連して問題を抱えている。彼らは、強迫観念を抱き、それに悩まされており、時としてそれが、「内臓の情動的反応」を伴って誇張された形で現れてくるのである。

ジャネ、ジェイムズとメイヨウの示す点を、こうした対応関係として把握した場合、次の2点を指摘しておく必要がある。その一つは、ジャネもジェイムズも、「スキル」という言葉を意図的に提示し、使用してはいないということである。たとえばメイヨウは、「スキル」を定義するにあたってジャネに言及したりしてはいるが³⁵⁾、しかし、ジャネ自身が「スキル」という用語を使用しているわけではない。こうしたことから「スキル」は、出処は定かではないが、この段階では、メイヨウが専門用語として導入したのと考えてよかろう。そして、このスキルの概念は、その後、メイヨウからレスリスバーガーへと受け継がれて行くことになる。第二の点は、ジャネが「心理学的現象の階層」の最上位に置いた「実在機能」を、メイヨウ自身は、階層の問題として扱ってはいないということである。彼は、先の意識にも見られるように、それを諸活動全体の「均衡」の立場から解釈している。

前者はここでの主題ではないので、これ以上の言及はしない。そこで以下、後者に関して若干検討を加えておくことにしよう。ジャネは、「実在機能」を、友人の哲学者ベルグソン (Henri Bergson) が「目前の生への傾注 (cette attention à la vie présent)」といったものに当たると

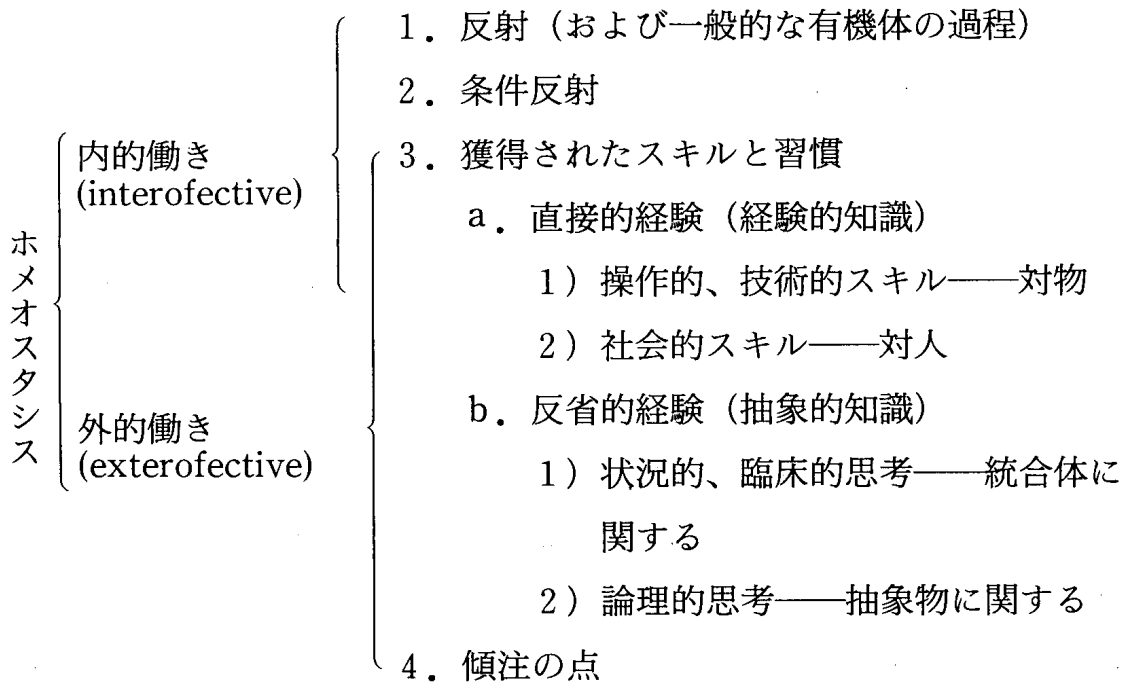
し³⁶⁾、それを心理学的現象の最高位の階層に置いた。その上で彼は、精神衰弱に関連して、「どの症候を取り上げてみても、本質的な障碍はむしろ、決断の欠如、意思決定の欠如、信念と注意集注の欠如、現実の状況に相応した適切な感情を覚えることの不能、という点にある³⁷⁾」と述べている。そして、こうした状況を「实在機能の喪失」と呼ぶ。これに対してメイヨウは、「实在機能」という用語はあまり使用していない。それに代えて、「積極的な応答」、あるいはレスリスバーガーと同様の「所与の瞬間における傾注行為」、また「学習や適応の時点」とか「現実感覚 (sense of reality)」などという表現をしている³⁸⁾。これら自体は、ジャネの「实在機能」に関する記述やより詳細な区分内容に照らしてみれば、それなりの対応関係を持っている。しかしメイヨウは、それらを、ジャネの示す形での階層の問題としては認識していない。彼は、自分自身のジャネ理論の理解として、「傾注あるいは所与の時点において積極的に応答する能力は、上に名をあげた多数の能力の間の秩序立った均衡の機能である³⁹⁾」と述べている。ここから明かなように、彼は、「实在機能」を「均衡」の問題として把握しているのである。そしてその理解に立って、「先に近似的に記述した秩序は、現時点の積極的な努力によって全体に課せられたものである。いかなる不均衡も、それ自体として直ちに積極的な機能、すなわち周囲の状況に対して機敏に傾注する能力の減退を示すことになる⁴⁰⁾」とし、「实在機能の喪失」を「不均衡」の状態として示している。確かにわれわれは、たとえば風邪をひいて頭が痛い時や疲れた時は、ただそれだけで、周囲に十分注意を払いながら駅に向かって走って行くことができなくなる。他の人にぶつかったり物につまづいたりしてしまい、思うようにならず、場合によっては頭にきて怒ってしまうものである。このように、不均衡の状態では、均衡状態にある場合のように適切な行動をとることができず、不適切な対応をし、しばしば情動的反応が伴うことになる。

この理解は、もちろんジャネの主張を離れたものではない。人格的解

離現象を示すヒステリー症患者の観察に基礎を置いたジャネが、筋肉の動きや活動に「無用な」とか「無関心な」という形容詞を付けているのは、逆に「動き」や「活動」が、实在機能が発揮されている状態、つまり高次の均衡状態ではじめて「有用な」、「関心のある」ものになることを示しているといつてよかろう。そこで、確かにジャネは、「精神的抑鬱のすべてにおいて最もしばしば、しかも急速に消失するのは、最も困難な機能の遂行であり、それは、ありとあらゆる形の現実を理解するという、今しがたその重要性を認めることになったばかりのあの機能なのである⁴¹⁾」と述べ、实在機能を重視する立場を取っている。しかしまた、「实在機能というものがあるが、それは、認知や行動を通して現実を把握することの内に認められ、それが加わるか否かによってそれ以外の全ての作用は著しく異なってくる、というのが私の見解である⁴²⁾」とも主張している。この彼の見解は、实在機能を中核に想定しているために表現こそメイヨウと異なっているが、まさに均衡仮説を言い表したものとつてよい。

このように、ジャネの考え方の中には、均衡仮説を前提としたと思われるような発想が多く見られる。メイヨウは、その点に注目してジャネの理論を把握し直している。そして、ある所与の時点で均衡状態を保ちながら現実に対応している状況を、「適応 (adaptation)」という言葉で表現する。もちろん、彼も言っているように、「われわれが目覚めて生活しているいかなる瞬間も、適応的瞬間である⁴³⁾。」そこでその瞬間、あるいはその適応の契機を彼は、これまでの点を要約するようにして、次頁に示す概念的図式の形で提示している⁴⁴⁾。

この図式は、メイヨウの解釈を経てはいるものの、基本的にはジャネの主張に対応したものである。しかし、それをジャネの示した「心理学的現象の階層」に関するより詳細な区分と比較してみると、そこには、ジャネ自身のみならず人間関係論にかかわる人々、特にレスリスバーガーが重要視して使用している「感情 (sentiment)」の概念が見られな



適 応 の 契 機

い⁴⁵⁾。確かに、先に示したジャネの階層には「感情」は示されていないが、「実在機能」と「無関心な活動」に関するより詳細な階層区分では、むしろ多くの段階でそれがかかわっている。たとえば前者には、「感情を伴った新たな行動 (l'action nouvelle avec sentiment)」という段階がある⁴⁶⁾。このように、行動、活動、認識に関連して、多くの段階で「感情」がかかわっているのである。そこで、メイヨウの記述している内容自体を見てみると、「感情」という用語が使用されていないわけではない。むしろその使用は、多いともいえる。しかし、この図式に関するかぎり、やはりそれを読み取ることは困難である。この対応関係の形式上の不一致は、たとえばメイヨウが、均衡仮説を示すことに力点を置いていたために、それが軽視されてしまった結果なのかも知れない。しかし、おそらくそれよりも、当時の段階では、事実に基づいた「感情」に関する研究がそれほど進んでおらず、ここにそれを組み入れることができなかつたからではなかろうか。確かに、パレートが「残基 (residue)」の問題として「感情」を扱っているが、ヘンダーソンとメイヨウにとって、

それは、この種の研究の出発点に位置づけられるものであった。

いずれにしても、メイヨウは、ジャンネが *Les Névroses* を著した頃までの彼の人間理解に関する理論を、概ねこのように把握していた。ところでジャンネは、人間を、これほど静態的に見ていたわけではない。彼の理論には、動態的な側面がある。それを知るためには、彼が仮説的に提示している「心理的エネルギー (l'énergie mentale)」と「心理学的緊張」のアイデアを理解しておく必要がある。前者は、一般的に力という形で現れてくる。それに対して後者は、彼自身が、「心理学的緊張の段階あるいは精神的水準の高さ (l'élévation du niveau mental) は、その個人が到達し得る最高の現象が例の階層において占める段階によって示される⁴⁷⁾」と言っているように、この力が現れてくる最高段階の心理学的水準を示すものである。たとえば健全な人間は、実在機能が正常に作用している状況にある。しかし、先に見たようにただ風邪をひいただけでも、人は、実在機能が作用しなくなり、行動が不適切になるだけでなく、しばしば情動的な対応もしてしまう。この情動的な反応は、ジャンネの示す階層ではかなり次元の低い現象である。逆に言えば、周囲の現実十分に注意を払って、実際に適切な形で対処して行くのは、最も高度な心理学的緊張とエネルギーを必要とする活動なのである。それを踏まえて考えれば、たとえば心理学的緊張が低下している場合は、心理的エネルギーも低い方がよいことになる。そうでなければ、たとえば他の人に、爆発的な怒りが向けられることにもなりかねないからだ。われわれは、融通のきかない権威主義的な老人や過度にストレスがかかっている人の行動の中に、この種の現象をよく見ている。もちろん、自らその種の行動をとった経験のある人も多いことであろう。時には、このような状況下で興奮したり硬直している状態が、「緊張している」と表現されるようなこともある。しかし、ジャンネの立場から見れば、それは緊張しているのではなく、逆に心理学的緊張が低下し、注意深い行為に代えて劣悪で誇張された活動が代用されている状態なのである。

この心理学的緊張に関しても、メイヨウは、均衡仮説の立場から理解する。ジャネが心理学的緊張の階層といった点を、彼は、どのような状態で均衡しているか、という形で把握しているといつてよかろう。どこかに不均衡が生じた場合、ジャネの言い方では心理学的緊張が低下することになるが、メイヨウの立場からは、全体として少し水準の下がった状態で均衡することになる。そして、水準の低い均衡状態で現実に対応して行く。こうした水準の低下を、ジャネの示した階層を使用して説明すれば、まず「实在機能」が最初に作用しなくなり、たとえば次節で扱うような、より低次元の「心象の機能」や「内臓の情動的反応」がそれに代わって現れてくる。均衡の立場から見れば、もちろんこれも現実への対応の仕方ではあるが、まさに水準が低い。それとは違って、最初から水準の低いものもある。下等動物がそれだ。たとえばアメーバーは、基本的に反射で均衡の最高水準に至り、そのレベルの範囲内で現実に対応しているといつてよかろう。このような形でメイヨウは、ジャネの主張が、より一般的な適用可能性を有しているものと考え。つまりこの図式が、人間や犬のみならず、こうしたアメーバーなどの単細胞動物にも当てはまるものと見ているのである⁴⁸⁾。そして、この場合の均衡水準の違いは、それぞれの有機体の持つ、自らを複雑にする能力に関して自然に備わった限界によって決ってくるものとしている⁴⁹⁾。

この一般化を可能にしたのは、抽象的な「均衡」概念の使用ではなかったか。それを中核に据えることによって、多くの人々のアイディアを結合することが可能になった。しかし、同時にそのことは、生物一般の問題を人間有機体の問題と関連させることにもなってしまう。そして、こうした操作を通してメイヨウは、この一般化を可能にしたといえよう。もちろん、ジャネ自身は、それほどまでの意図をもっていたとは思われない。あくまでも、人間のレベルで考えようとしていたのではないか。彼は、精神的水準よりも心理学的緊張という概念の方をよく使用しているが、それも、均衡や水準といった一般的ではあるが無味乾燥な言葉と

違って、その用語が、具体的な人間の観察を前提にした議論に適していると感じられたからであろう。

では、実在機能と心理学的緊張の関係はどのようになるのであろうか。正常な人間でも、心理学的緊張が低下した状態、すなわち精神的水準が下がった場合、実在機能も作用しなくなる。たとえば、強迫症者の「多くは、自分自身を、何か想像上のドラマで一つの役を演じている機械的な人物のように行動し、話をしているものと描いている⁵⁰⁾。」つまり彼らには、あまり現実感覚があるように見えない。疲れたときなど、確かにわれわれも、現実が遠い世界の他人事のように感じられることがある。それは、実在機能が作用していない状況であり、また、心理学的緊張が低下している状況でもある。この意味で両者は、同じ現象を示しているのであって、別の問題を表しているわけではない。この点に関連してメイヨウは、ジャネが記述している内容を検討した上で、「彼は、それらを『実在機能の喪失』と『心理学的緊張の低下』と呼んでいる。臨床的描写をすべて見た場合、これらの言葉は、それ自体ではほとんど意味を成さず、説明が必要である⁵¹⁾」と述べ、さらに、「両者は、本質的に同じ現象を指し示しているけれども、現実感覚の喪失が特徴的な徴候の直接の描写であるのに対して、心理学的緊張の低下は、この徴候を、ジャネの均衡仮説の観点から述べ直したものである⁵²⁾」と続けている。もちろん、先に述べたように、ジャネ自身が均衡仮説を提唱しているわけではない。メイヨウが、ジャネの主張を、そのように読み取っているわけである。

このようにメイヨウは、*Psychology of Pierre Janet* において、ジャネが、主として *Les Névroses* と *Les Obsessions* の中で示している点を検討している。しかしその著作は、メイヨウの執筆した、単なるジャネ理論の研究書なのであろうか。問題追求型のメイヨウは、著作の一節などは別として、これ以外には、他の人の理論を研究したものを公にはしていない。その彼が、1949年に他界する前年に、この最後の著作で、ジャ

ネの理論に関する研究をしているのである。こうした経緯から考えれば、メイヨウにとって *Psychology of Pierre Janet* は、単なるジャネ理論の研究書ではなく、ある種の集大成の書として考えてよいのではないか。もちろんそれは、メイヨウ自身の、人間理解に関する集大成といえる。そして、そこに示されている人間の理解は、彼から、レスリスバーガーへと引き継がれて行く、人間関係論の基本的な人間理解のあり方であったように思われる。

注

- 1) Janet, p., *Les Névroses*, Ernst Flammarion, 1910 (高橋徹訳『神経症』医学書院、1974年)。
- 2) Ditto., *Les Obsessions et la Psychasthénie*, Felix Alcan, 1903.
- 3) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 4.
- 4) *Ibid.*, p. 5.
- 5) *Ibid.*, p. 6.
- 6) cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 34. なお、その後ドーナムは、学部長の職を退いて、人間関係論のグループに属することになる。
- 7) cf. *Ibid.*, p. 35.
- 8) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 4
- 9) Idem.
- 10) cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 60.
- 11) cf. Cannon, W. B., *The Wisdom of the Body*, W. W. Norton & Co., 1932.
- 12) cf. Henderson, L. J., *On the Social System : Slected Writings*, Edited and with an Introduction by Bernard Barber, The University of Chicago Press, 1970, p. 3.
- 13) ホワイトヘッドは、1927年から28年にかけてギフォード講義を担当しているが、その内容が、彼の哲学の主著ともいえる著作として29年に公になる。
Whitehead, A. N., *Process and Reality : An Essay in Cosmology*, The Macmillan

- Co., 1929 (山本誠作訳『過程と実在』松籟社、1979年)。
- 14) Whitehead, A. N., *Science and the Modern World*, The Macmillan Co., 1925
(上田泰治、村上至孝訳『科学と近代世界』松籟社、1981年)。
- 15) 上掲書、邦訳、67頁参照。
- 16) Roethlisberge, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 32.
- 17) このセミナーは、パレートの著作 *Trattato di Sociologia generale* のフランス語版 *Traité de sociologie générale*, Payot, 1917を読みながら進められていた。参加者は、シュンペーター (Joseph Schumpeter)、メイヨウ、レスリスバーガー、ホマンズ、パーソンズ (Talcott Parsons) マートン (Robert K. Merton) などであり、ホマンズは、すでに一度それを読んでいたことから、助手の役割をしていた。またヘンダーソンは、ロシア革命に参加した経験をもつソローキン (Pitirim Aleksandrovich Sorokin) をそこに招待し、意見が対立したこともあった。cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, pp. 62-65; Homans, G. C., *op. cit.*, pp. 99-118.
- 18) Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology*, Harvard University Press, 1935
(組織行動研究会訳『組織行動論の基礎』東洋書店、1975年)。
- 19) Homans, G. C., *op. cit.*, pp. 102-105.
- 20) 実際システムの定義に関してみると、ヘンダーソンは、「あるシステムのなかで変数が相互に依存しているということは、われわれの経験から導き出された最も広範な帰納推理の一つである。すなわち、われわれは代替的に、それをシステムの定義と考えることもできる」と述べている程度である。それに言及した上で、レスリスバーガーは、「『システム』によって意味されるのは、各々の部分が他のすべての部分と相互依存の関係を持つことから、全体として見なされるべき何ものかである」としている。Henderson, L. J., *Pareto's General Sociology* (邦訳『組織行動論の基礎』50頁); Roethlisberger, F. J., and W. J. Dickson, *Management and the Worker*, p. 551.
- 21) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 263.
- 22) *Management and the Worker* の第23章では、公式組織と非公式組織の関係が

- 扱われ、それに続く結論部分の第五部の最初の第24章では、その関係を含む産業組織の構成要素全体の関係が示されている。cf. Roethlisber, F. J., and W. J. Dickson, *Management and the Worker*, pp. 525-568.
- 23) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 264.
- 24) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 47.
- 25) Idem.; Janet, P., *Les Névroses*, pp. 338-339.
- 26) メイヨウは、*Psychology of Pierre Janet* 以外にも、次の著作で同様の文章を引用している。Mayo, G. E., *The Human Problems of an Industrial Civilization* (邦訳『新訳 産業文明における人間問題』117頁)。
- 27) メイヨウは、聴衆に対して講演をしている話し手が暴行を受けるといった事例をあげている。cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 53.
- 28) cf. *Ibid.*, p. 62. メイヨウは、続いて言及するものを含めて、一次的自動性と二次的自動性の二つを示している。ジャンネ自身は、学位を請求した主要論文 *L'Automatisme Psychologique* で、自動性に関する研究をしている。その著作で心理的自動性の事例として掲げられているのは、硬直症 (catalepsie) や夢遊症 (somnambulisme) などである。これらの現象は、意識から全く分離された機械的なものではなく、断片的ではあるが、たとえば下意識の支配下で、それ自体かなり自律的に現れてくる。cf. Janet, P., *L'Automatisme Psychologique*, Felix Alcan, 1889. こうした点からすれば、ジャンネの意図した心理的自動性は、この一次的自動性よりも次に示す二次的自動性を意味しているといえよう。
- 29) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 96.
- 30) Henderson, L. J., *On the Social System*, p. 142.
- 31) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 59.
- 32) cf. James, W., *The Principles of Psychology*, Dover Publications, Inc., 1950, pp. 199-223. たとえばジェイムズは、自動性の中の自動筆記 (automatic writing) に言及している。自動筆記の症例を前提に考えれば、われわれは、自動性が身についている場合、自覚しなくても素晴らしい字を書くことができる可能性を持っていることになる。

- 33) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 53.
- 34) cf. Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, pp. 474-488. 特に487頁から488頁にかけて、全体をまとめる形で、「心理学的現象の階層」と題された図式が示されている。それは、かなり細部にわたる階層区分からなっているが、後に若干その細部にかかわる言及をすることになるが、ここでは、その最も概括的な階層区分だけを示しておくことにする。
- 35) cf. Mayo, G. E., *The Social Problems of an Industrial Civilization*, Routledge & Kegan Paul, Ltd., 1957, p. 12.
- 36) cf. Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, p. 477.
- 37) Janet, P., *Les Névroses*, p. 354.
- 38) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 63.
- 39) Idem.
- 40) Idem.
- 41) Janet, P., *Les Névroses*, p. 362.
- 42) *Ibid.*, p. 354.
- 43) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 105.
- 44) *Ibid.*, p. 102. なお、以下の図式に関連してメイヨウは、これまで述べてきた人物以外にも多くの人々のアイディアを検討している。ここで、図式の注にあげられている人物の名前だけ示しておくことにしよう。C. S. Sherrington, J. M. Charcot, W. H. Gaskell, J. N. Langley, H. Head, I. P. Pavlov, W. B. Cannon, W. James, J. Piaget である。cf. *Ibid.*, p. 110.
- 45) レスリスバーガーは、「事実」と「感情」を区別する問題を提起するとともに、非公式組織に関連して「感情の論理」の存在を示す。Roethlisberger, F. J., and W. J. Dickson, *Managment and Worker* の中の、特に第三部と第五部参照。
- 46) cf. Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, pp. 487-488.
- 47) Janet, P., *Les Névroses*, p. 363.
- 48) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 64.
- 49) Idem.

50) *Ibid.*, p. 87.

51) *Ibid.*, p. 64.

52) *Ibid.*, p. 86.

V. 強迫症と「誤った二分法」

話を強迫症の問題へ進めよう。ヒステリー症は人格的な病である。患者は、発症時にしばしば人格の解離現象を示し、それまでとは違って別人のように発言したり行動したりする。しかし、正常な状態では、発症時のことを忘れていたり、あるいはそのことに無関心となってしまう。そのため、本人は病に気づかず、気づくのは周囲の人々である。それに対して、強迫症は人格的な病ではない。患者は、自分を悩ませているものが何であるのかをよく知っている。それを他の人に教えることができるのも、その人自身である¹⁾。この強迫症者に関しては、ヒステリー症者の場合に有効であった催眠状態での試みが、ほとんど効果を持たない。そして、医者が考えて意図的に与えた示唆に対して、彼らは、冗長で的外れの推論や議論で応えてくる傾向がある。このようなことから、患者に憤慨してしまった医者もいたようだ。また、認識されるようになった初期の段階では、強迫症は、ヒステリー症よりも深刻な病と考えられることにもなってしまった²⁾。

強迫症に関するジャネの研究成果は、主として大著 *Les Obsessions* に示されている。それは、男性95名女性230名、合わせて325名にもおよぶ多くの事例に裏打ちされて書かれたものだ³⁾。メイヨウは、ジャネがそこで提示しているケース・ヒストリーから、強迫症者の深刻な精神的破壊の前兆となるものを求め、「強迫症に関して典型的なのは、いわゆる『断絶 (breakes)』が興奮 (agitation) への転機であり、そしてそれ自体としては、通常の状態にある患者の束の間の激情 (intensification) 以外の何ものでもないということである⁴⁾」と述べる。さらに、それに

続いて、「先入観はほとんど絶え間なく存在し、ただ激怒した瞬間にのみ現れてくる⁵⁾」というジャネの言葉を引用している。もちろんこうした現象は、たとえば激情にかかわることに限って見れば、何も強迫症者に特有のものではない。先に述べたように、過度にストレスがかかっている人の反応などとしてよく目にする日常的な現象ともいえる。ただ、強迫症者の場合は、思考のある領域が大きく冒されている点で、普通の人と異なっている。ところが、それがどの領域であるかに関しては、普通本人が語ってくれなければ判らず、それ故、それを前もって予測することもできない⁶⁾。

強迫症者は、この冒された領域に関連して強迫観念や先入観を持っている。しかし、全ての事例は個別的で異なっており、強迫観念や兆候も患者によって違う。そのため、これらの点に注目して強迫症を一般化することは困難である⁷⁾。それでもジャネは、強迫症者の持つ多様な強迫観念の分類を試みている。そして、「冒瀆の強迫観念」、「犯罪の強迫観念」、「自己羞恥の強迫観念」、「身体羞恥の強迫観念」と「ヒポコンデリー症の強迫観念」の五つの強迫観念を示す⁸⁾。たとえば、ある「冒瀆の強迫観念」をもった患者は、「いつも悪魔が何か卑猥なことをするようにそそのかすものだから、救霊をするのが邪魔されてしまう⁹⁾」と訴えるという。これをはじめとして、ジャネが示す症例は、かなり重度のものばかりである。しかし、「羞恥の強迫観念」に関連して彼が、「確かに、症例によっては羞恥というほど強くなく、物足りなさというくらいの場合もあるが、ともかくこれらの例をまとめて羞恥の強迫観念と総称しておくことにする¹⁰⁾」と述べているように、一般的に言って強迫症には、重度のものから軽度、あるいは良性のものまでさまざまある。メイヨウとレスリスバーガーが対象としたのは、その中でも軽度の方といってよい。

メイヨウは、これらの強迫症者に関し、ただジャネの著作に依存しているだけではない。実際に、そうした人々との接触の経験を持っている。

もちろん、彼の指導のもとでレスリスバーガーが行った多くの「カウンセリング」も、その中に含めてよいであろう。しかし、彼にとっては、それ以上に、ハーバード大学に来る前のオーストラリアとイギリスで出会った人々が印象的であったようだ。彼は、それらの人々を「破壊者」や「ガンマン」と名付け、彼らとの接触の経験から、強迫症者の特徴を次のようにまとめている¹¹⁾。

1. 扇動者レベルを除けば、これらの人々には友人がいなかった。彼らは、他の人々と簡単な結び付きを持つことができないように思われた。それとは反対に、そうした関係を持つ必要があるのは、彼らにとって、精いっぱい努力しなければならない非常事態なのであった。
2. 彼らには、話を交わす能力が何もなかった。彼らの話は、身の上話と、社会の崩壊のような人の心を動かさずにはおかない話題を再演する雄弁との間を行ったり来たりしていた。
3. 社会的な交際のように、彼らにとって、全ての行為は非常時の行為であった。共同作業への日常的参加、あるいは「普通のこと」といった観念は、どんなものも著しく欠けていた。たとえいかにつまらないことでも、全ては、莫大で不条理な「精力」を伴って着手された。
4. 彼らは、世界を敵対的な場所として見ていた。いかなる信念や行為も、社会が、彼らに機会を与えるためではなく、それを拒むために存在しているということを暗示していた。その上彼らは、この敵対性が、それ自体は何も作用しないものとしてではなく、活発に作用してくるものと信じていた。彼らは、全ての人を、すぐ隣の自分の仲間できえ、こぞって自分に反対する勢力を構成するものとして見ていた。

そして彼は、こうした特徴が、自分自身の経験に限定されるものではなく、強迫症者一般に見られるのではないかと期待している。

この強迫症者の状況は、極端に言えば二つの異なった形をとって現れてくる¹²⁾。その一つは、「破壊者」のように「世界は敵対的だ、攻撃してやれ」と考えを進めるタイプであり、もう一つは、防御と独居を求める人のように「世界は危険だ、十分に注意しなければならない」と考え込んでしまうタイプである¹³⁾。前者は、他人に対して残忍となり、後者は自虐的で、メイヨウは、自殺に走る人の大多数がこの後者に属するものと見ている¹⁴⁾。これらに関連したレスリスバーガーの記述をみると、彼は、前者について、「われわれは、彼が非常に急進的で、不快なほどに論争的であることに気づく。彼は、可能な限りの不幸を際限なく増殖させるか、あるいは成功に関する馬鹿げた壮大な観念を心に抱く傾向がある」と書いている。また後者に関しては、「彼は、ややもすれば非常に寡黙で、控え目で、そして自意識が強い¹⁵⁾」と述べている。しかしレスリスバーガーは、それらを事例として示しているだけであって、何ら明確な区別も意図しておらず、その点に関するそれ以上の展開はしていない。

それに比べてメイヨウは、ジャネが、強迫症者の三分の二以上が後者だとしていることを踏まえ、両者を区別するとともに、後者をその典型とする立場をとる¹⁶⁾。そして、1938年の段階で、ハーバード大学の医学部において、そうした人々に焦点を当てた「おびえる人々 (Frightened People)」と題する講演をしている。その内容は、後に *Psychology of Pierre Janet* の「付録」として掲載されることになる¹⁷⁾。焦点が当てられているのは、医者と患者の関係である。メイヨウは、そこで、人格的な状況を三つのタイプに分けて論じているが、それらについて、彼特有の用語に対応させる形で両極的に示せば、「確立された社会 (established society)」では、たとえ怪我や病気などで不安になったとしても、知合いの医者を含め、親しい者からなるその地域の社会全体が保証

(assurance) を与えてくれて、患者がおびえることはない。それに対して「適応的社会 (adaptive society)」では、患者は社会的に孤立しており、知合いでもない医者言葉は、必ずしも彼に保証を与えるものとならず、場合によっては、逆に不安を感じさせるものにもなってしまう¹⁸⁾。こうした不安な心理状況に置かれている患者こそ、「おびえる人々」であった。メイヨウは、これらの点をより端的に、「第一のタイプにおいては、社会システムが保証の手助けをする。ところがこの第三のタイプにおいては、社会システムに対する確かな機能的関係の欠如が、不安と恐怖の感覚を創り出すのに荷担しているのである¹⁹⁾」と述べている。

「おびえる人々」の事例として、メイヨウが提示しているものの中から、一つ簡略化して紹介しておこう²⁰⁾。田舎の新設の高等学校に、都会から校長が赴任してきた。彼は、優秀で真面目であるが、家族のことに関連して、都会の仲間とはうまくやって行けないと感じていた。それが理由で、田舎へやってくることにしたのかも知れない。いずれにしても彼は、自分が「社会的な放浪者」だという恐怖感をもっていたのである。自分に関するこうした見方があるため、田舎の人々にも溶け込むことができず、結局ここでも孤立してしまっていた。そんな折り、別に病気でもないのに彼は、診察を受けようと医者へやってきた。診察といっても、検査に異常はなく、最終的には医者がただ彼の話を聞くだけといった感じのものになってしまった。診察が終わり、医者は、別に他意はなく、彼に「インフルエンザにかからないように」といった。しばらくして、実際にインフルエンザの警戒が出されることになったが、彼は、感染したわけでもないのに極度な不安に陥り、都会の病院に送られることになってしまったのである。

この事例で、彼がインフルエンザのことで一人思い悩んでいたことは、想像するのに難くない。しかし、それ以上に問題は、すでにその段階で、彼が、社会的に孤立して強迫症的状况になっていたということである。むしろ彼は、そのために、現実には注意を払うことができず、一人になっ

て些細なことに思い悩んでしまったというべきであろう。こうした強迫症的状況においては、強迫観念と先入観、そしてそれらに基づく思考が大きく作用している。ヒステリー症者の場合、発症時には、しばしば二次的自我のもと、性的外傷体験の時に受けたような断片的な固着観念 (*idées fixes*) が行動を支配する。強迫症者の場合に問題となる強迫観念や先入観は、そのように断片的なものではない²¹⁾。たとえば、例の校長が自分を「社会的な放浪者」として見るようになってしまったのも、具体的な状況で、家庭の問題と同僚との関係に関して彼自身が長い間考え抜いた末のことである。このようなことから、強迫症者の先入観は、一時的な性的外傷体験に基づくようなものではなく、日常生活の中で思考し行動するその人の人格的な努力によって形成されたものだといえる。ジャネの表現を使用すれば、そこには、「人格全体の協力 (*la une collaboration de toute la personnalité*)²²⁾」が存在しているのだ。その結果として導き出されてくる兆候も、たとえそれが、メイヨウが別に例示している排尿のような惨めなものであろうと、「長年にわたって展開してきた、絶え間のない高度に工夫された思考過程の必然的な最終結果として現れてくる²³⁾」のであって、それ自体は、患者の思考から切り離し、彼の肉体的無能力に帰してしまうような形で扱われるべきものではない。また、この場合に見られる先入観は、長い思考過程で注意深く組み立てられ、精緻な構造を持っている。その結果、用心深さが現れてくるが、それは、行為の結果に対して自分を守るように設計されている。そして、校長が自分を「社会的な放浪者」と認識し、同僚から自分を遠ざけることによって家族に関する喜ばしくない強迫観念の問題を解決しようとしていることからいえるように、これらの先入観は、その人の持つ特定の強迫観念を正当化するように作用している²⁴⁾。こうした強迫症者は、自分の欠点や他の人との違いを苦渋に満ちた形で認識しているのだが、メイヨウが気付いたところでは、その上、「彼の行うすべての推理のすぐ隣にある後背地には、自分自身が価値の無いものだという苦

しい信念が鎮座している²⁵⁾」ということだ。こうした信念があるために、彼らは、現実の世界に距離を感じ、物事を現実感覚をもって認識することができなくなり、あたかも他人事のように感じたり、自分自身が夢の中にでも居るかのように感じたりしてしまうのかも知れない。

ところでレスリスバーガーは、自分がカウンセリングを行った学生のことを、その優秀さから「厳密で優れた論理学者²⁶⁾」と呼んでいる。彼らほどではないにしても、一般的に言って強迫症者は、知的には優れているといえるようだ。そうした点から見て、彼らは、思考することに関する限り何も問題はない。たとえば彼らは、しばしば白日夢を見たり、幻想的思考、自閉症的思考、無軌道な思考や散漫な思考をすることもあろう。しかしそれらは、正常なわれわれでもよくあることである。レスリスバーガーは、これらの思考を「空想的思考 (revery thinking)」と呼ぶとともに、「最も創造的で想像的なのがこの種の思考だ²⁷⁾」とも述べている。その意味で、こうした思考自体は、強迫症者に限定されるものでもなければ病的なものでもない。

均衡仮説の立場に立つと、人間の精神が健全であるためには、こうした「空想的思考」を含むさまざまな思考に加え、既に述べてきたその他多くの機能の関与と、それらの適切な作用が必要となる。どれか一つが順調に機能しなくなれば、結局均衡水準が低下し、何らかの形で問題が生じてくる。こうした要素の中でも、特に思考は、人格に関して重要な役割を果たすものである。われわれは、何か問題が起これば、ああだこうだと「内省 (reflexion)」をする。そして、こうした思考過程の中で、経験について統一ある意味づけを行い、それを基礎として具体的な行動を導き出して行く。ジャネは、その点を「内省は、われわれの活動を監督しており、それ故にそれらは、活動のある基本的なルールに従わせる。それも特に、われわれ自身の個人的な関心に従わせるのである。このようなことから、内省は、活動の重要さはいかにあろうとも、それがなされる場合にはいつでも作用している²⁸⁾」と表現する。つまり内省

や思考は、その人の行動に一貫性を与え、その人らしさを形成し、人格を統一する要素である。

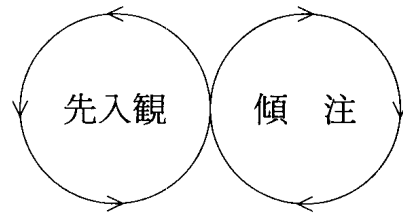
ところが、強迫症者の思考は、行動との結び付きの点で問題がある。たとえば彼らは、しばしば心の中で絶え間のないおしゃべりをしている。もちろんわれわれも、時々同じことをする。しかし彼らの場合、それが、行き着くこともなければ決断に至ることもなく、過度に論理的になったり、あるいはただ繰り返される傾向が強い。その一方で、論理が尽くされ、最終的に決定に至るまでは行動に移すことができないという、注意深い仮説も作用している²⁹⁾。そのため彼らは、よく内省的思考はするものの、結果として具体的で意識的な行動を起こすことは困難となる。特に、実験とか冒険、あるいは試行錯誤といった観念は、その思考過程に入り込むことができない³⁰⁾。逆に、具体的な行動や決断が求められると、彼らは、それに対応できずに躊躇し、場合によっては興奮したり硬直したりしてしまう。先に列挙した、メイヨウの示す強迫症者の特徴に関連させて彼らの思考をみれば、彼らは、身の上話に代表されるような過去のことを考えるのには問題がない。未来を想像することについても、時として世界の崩壊のように悲観的色彩が強くて過激であったりはするけれど、それ自体としては問題がない。しかし、彼らの思考には、今ここでどうするかが欠けているのである³¹⁾。ある意味で、責任をもって具体的に行動することを拒み、思考に逃避しているといつてよいかもしれない。メイヨウは、このような強迫症者について、「彼らは、明白なことについて根気よく何度も考え直すことのエキスパートである。つまり彼らは、自分自身は遂行できないかあるいは自らそう感じている関心の的の主要な活動に代えて、些細な活動を過度に誇張された正確さでもって遂行することを当てるのである³²⁾」という。また彼は、ジャネの主張を要約するようにして、「強迫症者の精神的能力は、抽象的なあるいは想像上の対象について作用する場合には乱れていない。つまり、何か現時点で具体的な活動が求められるまでは、崩壊の兆候は現れてこないの

ある。過去もまた、想像的なものや抽象的なもののように、同等の安心さを持って扱われるが、しかし、『現在は、侵入という効果を持つ。』最も鮮烈な困難は、現在における決定や行動の必要性との関係から生じてくる³³⁾』とも述べている。

いずれにしても、強迫症者は、かなり複雑に思考することはできる。しかしメイヨウは、それでも「実際に彼らは、十分に複雑ではない³⁴⁾」という。どうしてであろうか。すでに述べたように、強迫症者は、むしろ過度に厳密な形で思考する傾向すらある。また、適切な感情を持つことができず、しばしば情動的に反応することもある。しかしこれらの多くは、ジャネの心理学的現象の階層に戻ってみると、「実在機能」、「無関連な活動」の次に来る「心象の機能」と「内臓の情動的反応」に属する低い次元の現象であった。それらの現象が現れるのは、均衡の水準が低下したからである。ジャネは、「人が強迫症者と多くの経験を積めば、その時には、哲学的思索が人間の心の病とさほど違いがないのではないか、といった悲惨な問いをするに至る³⁵⁾」と述べているほどだ。それ故、彼らのこうした厳密な思考自体、むしろ「劣等さと過剰な反応」に類するものと理解されるべきではなかろうか。

思考がいかに複雑であろうと、現実はそのよりはるかに複雑である。求められるのは、そうした複雑な現実への「適応」だといえる。その場合、現実傾注し、それに基づいて思考し、さらにその思考を反映する形で行動することが求められる。残念ながら強迫症者は、「実在機能」が低下しており、現実感覚をもって物事に傾注する能力を欠いている。そして、思考のみが空回りする傾向が強い。その過程で彼らは、環境を敵対的に認識するようにもなっていく。レスリスバーガーは、こうした思考の展開を次のように要約する。「強迫症者は、自分の直接の環境に注意を固定し、そしてそうし続ける能力が低下している。……自らの環境への不適切な方向づけは、この機能低下に由来するものである。傾注し続けることの無能力に続いて、識別の欠如が現れてくる。適切な識別

の欠如は、結局誤った観念をもたらす。このようにして展開される誤解は、全体として敵対的な態度に向けて組織化される。そして、この種の不適切な方向づけは、次にその個人と環境の間に欠陥に満ちた関係を育むことになる。このようにして、強迫症者の『魔のサークル』が創造される³⁶⁾と。後に彼は、この「傾注」と「思考」、特にその基礎の一つである「先入観」との関係を、次のような図式で示す³⁷⁾。



結局強迫症者は、ここに示されている「傾注のサークル」と「先入観のサークル」が噛み合っていない。「傾注のサークル」が機能せず、それ故「先入観のサークル」がチェックを受けることなく、勝手に空回りして増殖してしまうのである。

重要なのは、「先入観」と「傾注」が相互に関連していることだ。その関係によって、人は成長するともいえる。つまり、複雑な現実に対する傾注から先入観が修正され、適切な認識が得られるようになる。それを基礎とし、現実に対して積極的に試行錯誤を重ね、より適切な行動のあり方を求め、複雑で適切な応答体系を形成して行くのである。結果として、現実との間には、よりよい関係も形成される。こうした過程では、監督役の思考が適切に作用し、行動を統制するとともに自らの経験に統一を与え、人格に一貫性をもたせる。このように、一方では複雑な現実適切に応答できるようになり、他方人格的に統一されて行く、これこそ成長といってよかろう。その意味で、複雑になるということは、成長することでもある。ところが強迫症者は、「傾注」と「思考」や「先入観」とが連動していない。その結果、先入観を基礎に思考が暴走するだけで、経験に統一を与えることができず、逆に不安や恐怖心だけが増大してしまう。そのため彼らは、行動をためらってしまい、成長も止まる

ことになる。メイヨウは、こうした過程について、ジャネの主張している内容を自分の言葉にして、次のように述べている。「彼が指摘していることは、もし知的労作が、ある所与の点における実行と試みに積極的な関係を持たないのであれば、その時にはその労作は、その個人が周囲の環境との関係を発展させ複雑なものにする手助けとはならないということである。反対にそれらは、それにとって代わり、そして少なくとも一時的には、そのような発達を遅らせるかあるいは止めてしまう傾向があるのである。ある所与の段階で、一端このことが起きてしまえば、程度低下の動きが始まり、個人は、次第に、活動に代えて終わることのない討論をより多く代用させるようになり、彼の活動する能力は減退してゆき、そして、恐怖が現れはじめるのである³⁸⁾」と。このように、恐怖感を持ち、活動できずにいる人々こそ、メイヨウが典型として示した強迫症者であり、まさに「おびえる人々」であった。

ここに、一つ注意を必要とする点がある。それは、強迫症者が、恐怖心があるために行動することができない、という見方があることだ。ジャネもメイヨウも、そのような考えは持っていない。彼らは、強迫症者の恐怖感、精神的疲労や興奮などは本質的な問題ではなく、あくまでも二次的なものだと見ている。そしてメイヨウは、「不安と疲労は複雑化が原因である³⁹⁾」と主張する。つまり強迫症者は、複雑な状況に対応できないがために、知的労作を重ね、不安を感じたり恐怖感を持ったりし、結局そのことだけでも疲労してしまうのである。それ故本当の問題は、恐怖や不安、あるいは疲労自体ではなく、彼らに見られる、現在の状況に対して適切で積極的に対応して行く能力の欠如である。

先に示したように、ジャネは、こうした具体的な状況を物質的実在と社会的実在に分けている。もちろん、物質的な現実に対応するのも非常に困難なことである。レスリスバーガーが、アメリカン・スメルティング・アンド・リファイニング社で直面した困難は、この物質的な現実への対応であった。しかし、社会的な現実は、もっと困難なものだといっ

てよかろう。レスリスバーガーと同じ頃、共に非公式組織に着目したバーナード (Chester I. Barnard) は、社会的要因に関連して、「二つの人間有機体間の相互反応は、適応的行動の意図と意味に対する一連の応答である⁴⁰⁾」と述べている。意図も物事の意味づけも異なった人々が相互に作用し合うのである。この応答過程は、頭の中の閉ざされた思考の世界のように安定した状態ではありえない。合意や習慣などといった、何らかの結果をもたらすこともあるが、しかしそれは、必ずというものでもなければ、明確に予想されるものでもない。たとえば、自分が変われば相手も変化し、相手が変われば自分も変化せざるを得なくなるような状況である。これは、人と物質との関係には見られない複雑さといってよかろう。そして関係する人が増えれば、その状況は、さらに一層複雑になって行く。そこでジャネは、「心理学的分析がわれわれに明確に示すところでは、社会的行為は最も複雑な人間的活動であり、そして、自分を取り巻く諸個人への順応によって必要とされる費用は、飛び抜けて高いものである⁴¹⁾」と述べている。強迫症者は、この複雑な社会的現実に対して適切に対応できない。彼らにとって、「いかなる社会的な出来事も、非常事態であり、莫大な『精力』を蓄えてのみ対応することができる危機なのである。そして、もしその努力がなされるならば、患者は、その後に極度の消耗を経験することになる⁴²⁾。」もちろん、こうした社会的な出来事は、正常な人にとっては、多くの場合普通のことであって、それほど意識する必要のないものである。つまり、かなりの程度まで「自動性」の世界で処理されている。しかし強迫症者は、その種の出来事に対して具体的に対応することが困難な状態にある。加えて、単にそのことが要求されただけで考え込んでしまい、思い悩むだけで疲れてしまうのである。

ホステス・ハウスへは、こうした強迫的状况に陥っている学生が送られてくる。レスリスバーガーは、彼らにカウンセリングをし、その過程で、彼らの思考に見られる一つの特徴に気付くことになった。それは、

過度の単純化と過度の誇張表現である。一見矛盾するように思われるかも知れないが、たとえば数学がそうであるように、精緻な理論体系のためには、基本的なところで単純化が必要なように思われる。逆に言えば、概念が確定できないような状態では、おそらく、理論を精緻化することも困難であろう。これとよく似たことが、強迫症者の思考に関してもいえる。つまり、強迫症者の厳格で精緻な思考の背後には、物事の認識にかかわる過度の単純化が存在しているのである。ところがそれは、複雑な現実との対応関係からみれば、必ずしも間違いだというわけではないが、基本的には不適切なものといわざるをえない。一般的な表現でいえば、「白か黒か」、「1か0か」、あるいは“all or nothing”といった考え方がそれである。現実の世界では、そのような状況はほとんど有りえない。それなのに、無理に単純化して二分割してしまう。レスリスバーガーは、それを「誤った二分法」と呼ぶ。

強迫症者は、複雑な現実を、このような形で二つの対立する選択枝に分ける。そして、そのどちらかを選択し、それに従って思考をまとめ、行動して行くのである。たとえば、セールスマンに気楽に昔話をしていた人が、いざ商談となると、そこに対立や闘争があるように考えてしまい、急に話を止めて身構えることになる。また、嫌いな人がいた場合、その人の行為は、どれも自分に対して敵対的なもののように見えてくる。たとえそれが、相手の親切心から出た行為であってもである。このように、こうした思考は一般に、極端で誇張された形で現れてくる傾向がある。レスリスバーガーは、ビジネス・スクールに来る前に哲学研究科の大学院生として数理論理学を学んでいたことを窺わせる表現方法で、この「誤った二分法」について、次のように説明している。つまりそれは、「複雑な問題をばらばらに砕いて、『Aが真ならばBは偽であるか、あるいはBが真ならばAが偽である』といった性質の二つのものに分けてしまうことであり、それも、問題が、このように二分割された各々が相反してはいるがしかし相矛盾しておらず、それ故、『AとBが共に偽で

あるかも知れない』という場合にである⁴³⁾』と。特に、相矛盾はしていないのにそのように認識することが問題である。このように、物事を際だった対立関係に整理するからこそ、思考や表現、あるいは行動が極端で誇張されたものになってしまうのではないか。こうした思考は、まさに誤っている。

レスリスバーガーは、論文“Obsessive Thinking”において、こうした「誤った二分法」に関し、特に基本的だと思われるものをリストアップしている。「安全対危険」、「成功対失敗」、「優越対劣等」、「良い対悪い」、「慎み対ふしだら」、「服従対反抗」、「傍観者対参加者」、「独立対従属」、「理論対実践」、そして「仕事対遊び」の10項目がそれである⁴⁴⁾。ここで、一例として、「成功対失敗」の二分法について少し見ておくことにしよう⁴⁵⁾。レスリスバーガーは、それが「安全対危険」の二分法とセットのものであり、「安全対危険」の二分法が子供や未開人に多く見られるのに対し、「成功対失敗」の二分法は、現代文明のもとで生活する、知的ではあるがしかし強迫観念に取り付かれた大人の思考方法に限られるものとしている。このことから、当然、ハーバード大学やそのビジネス・スクールにこの種の思考をする人が多くいることが予想されよう。この強迫症者にとって、成功と失敗の間には何も中間領域がない。成功と失敗の先入観しかなく、自分の行動や他人の行動をそのどちらかの観点だけからみている。そして、先入観に支配された彼の思考は、この二つの極を行ったり来たりする。だから、彼らが失敗を問題にする時には、同時に成功がかかわっているのである。その場合、一般に成功の観念は貧弱であって、失敗の観念は過度に誇張されている。レスリスバーガーが具体的に示しているケースでは、大統領としてホワイトハウスで暮らしている自分を思い描いていた人が、いくつかの問題に直面して、最終的に罪を犯して投獄されている自分を思い描くようになってしまった。

ところでメイヨウは、ジャネが強迫症者の観察から一般化し、*Les*

Obsessions の「序」の部分で本論に先だって示している内容を、箇条書のようにして提示している。それらは、これまで検討してきた内容を含むものであるが、重複を承知で掲げれば、第一に、強迫症の事例が20歳代から40歳代にかけてに最も多いこと、第二に、強迫症者はある程度知的で教養があること、そして第三に、強迫的な思考習慣や生活習慣を徹底的に直すためには長い時間がかかることである⁴⁶⁾。たとえば期間に関してみると、ヒステリー症は、人格の解離現象から回復するのにそれほど時間がかかるわけではない。場合によっては、必要な手続きを手紙に書いて患者に郵送するだけで済む。ところが強迫症は、直るのに何年もの年数がかかるのが普通である。確かに、長年かけて築いてきた先入観である、それをすぐに変更することなどできるわけがない。これらの点を踏まえてメイヨウは、強迫症に関し、彼独自の立場をとることになる。ジャネやフロイトは、ヒステリー症に関する医学的研究から研究活動を始め、その進展過程で強迫症に気付くことになった。そのため両者とも、強迫症に関しては、基本的に病理学的立場から把握しようとしている。それに対してメイヨウは、「ジャネとフロイトの調査の両方が暗に示しているのは、多くの強迫症の問題が、用語上の最も広い意味において教育の欠陥に由来しているということであると信じている⁴⁷⁾」とし、自らの理解の独自性を示す。

先に述べたように、確かにメイヨウは、本来精神病理学者であった。その意味で彼は、ジャネやフロイトと同じ視点を持っていたといってもよからう。しかし彼は、同時に、オーストラリアにいた段階で文化人類学者のマリノフスキー (Bronislaw Malinowski) と親しくなり、若干ではあるが一緒に仕事をしたこともあった⁴⁸⁾。また両者とも、方法論的には、当時一般的であった理論に重きを置く立場ではなく、事実や証拠を重んじる立場をとっていた。その点では、ジャネの博物学的研究方向と共通している。またメイヨウは、その後、ホーソン調査にマリノフスキーの弟子にあたるウォーナー (W. Lloyd Warner) を参加させ、「バ

「バンク巻線観察室」の調査の設計を任せている。その事実からみると、この調査研究は、社会学的研究である一方で、文化人類学の応用という側面を持っていることにもなる。そしてこのウォーナーは、後にシカゴ大学に移り、文化人類学を近代社会に適用した膨大な業績、*The Yankee City Series*⁴⁹⁾を公にする。その研究の初期の段階では、まだ資料がハーバード大学に持ち込まれており、彼の弟子とレスリスバーガーは、それを巡って交流を持っていたようである⁵⁰⁾。またホマンズは、この「バンク巻線観察室」の調査結果を自らの研究に活用し、*The Human Group*⁵¹⁾を公にしている。彼に関しては、先にヘンダーソンの弟子として紹介したが、しかしヘンダーソンは、方法論的にパレートに心酔してはいたものの、社会学や文化人類学の知識をほとんど持ってはいなかった。そこでホマンズは、これらの領域の知識に関しては、実際にはメイヨウから学ぶことになる⁵²⁾。こうしたことから明らかなように、メイヨウは、精神病理学者である一方で、社会学や文化人類学にも精通していた。ただし、ホーソン調査以前の段階では、彼自身は、それほど本格的な社会学や文化人類学の調査研究をしていたわけではなく、これらの領域の知識に関しては、基本的に他の人の著作、特にマリノフスキー、ラドクリフ＝ブラウン (A. R. Radcliffe—Brown) やデュルケイムの著作に依存はしていたのであるが⁵³⁾。

こうした知的背景をもつメイヨウは、一つの現象を、心理学的視点と同時に社会学的視点の両方から見ることができた。つまり彼は、強迫症を、個人の病の視点からだけでなく、社会の問題の視点からも把握していたのである。ここから、病んでいるのは個人なのか社会なのか、といったような疑問も出てくる⁵⁴⁾。その当時のメイヨウは、次第に社会の問題の側面に力点を置くようになっていた。彼の有名な三部作の全てが、産業文明を研究対象にしていること自体、まさにこの点を示しているものといってよかろう⁵⁵⁾。もちろんジャネも、ヒステリー症が減少していることを認識する一方で、強迫症が社会文化的要因から影響を受けたも

のであることを認めている⁵⁶⁾。しかしメイヨウは、その認識をさらに進め、強迫的思考を「教育の病」だとする⁵⁷⁾。

メイヨウが目撃した19世紀末から20世紀初頭にかけての西欧社会のみならず、今日の日本でもいえることであるが、問題の一つは、現代社会に見られる知性偏重的傾向であろう。そこでは、実行すること、あるいはそれに伴う感情が軽視されている。一般に学校では、知識が重視され、人は、それをいかに多く知っているかに基づいて評価される。そして、あたかも「知っていること」が「できること」であるかのような感を呈している。しかし、知っているからといってできるわけではない。ジェイムズの用語を使えば、「抽象的知識」はあっても、「経験的知識」がない。ところで、現代社会においてこれほどまでに重視される知性は、どの程度の頭脳作業を必要とするものであろうか。すでに述べたように、最も繊細でそれ故先ず最初に喪失するのは、現実感覚あるいは実在機能である。そこでジャネは、現実への対応が最も多くの頭脳作業を必要とするものだと考えている。この見方に立つと、美しい花を実際に感動をもって眺めること、スポーツで積極果敢に機敏なプレイをすること、おそらくこれらは、演繹的推論よりも多くの頭脳作業を必要とする現象であろう。しかしわれわれは、あたかも、哲学的思索の方が多くの頭脳作業を必要とする高度なものだと思い込んでいる。それは、多くの場合、精気のない観念を結合させる作業であり、現実への応答と比べれば、はるかに静態的で単純な対象を扱っているといつてよからう。

このことは、もちろん、知性を軽視するものではない。確かに、知性偏重主義は、それ自体を見れば「劣等さと過剰な動き」といった強迫症の兆候の一つということもできる。しかしメイヨウは、「この主張は、活動を拡大し強化する知的発達には当てはまるものではない。実行上の能力に取って代わるような無味乾燥な知性偏重主義にこそ当てはまる⁵⁸⁾」といっている。人は、「適応」の過程で経験を積んで成長して行く。しかし強迫症者の場合、思考は拡張するものの、行動が伴っていない

い。そのような状況では、単に現実に対して応答することができないというだけではなく、そのために必要な自動的で習慣的な行動を身につけることもできないのである。メイヨウは、こうした習慣的な活動のあり方を「スキル」と呼ぶが、それを身につけるためには、経験、あるいは現実への積極的な応答経験が必要である。この習慣的スキルは、先にも述べたように、単なる繰り返しではない、さまざまに変化する状況に対し、人間有機体が全体として直観的に応答して行く能力ということができる。一般的に言って、それは、現実への積極的な応答の中で、知的成長と共に向上して行く。そこでメイヨウは、これに反し、知的労作に専念するあまりに行動できない強迫症者について言う、「この興味深い習慣の二次的自動性発達の拒絶は、自らをうんざりさせ、すっかりみじめにし、そしてある事例では、深い憂鬱へと導いて行くのである⁵⁹⁾」と。強迫症者は、何かしようと思っても、その前提となる行為を遂行することができず、結局その思いは達成されない。たとえば、われわれが景色を眺めながらドライブをしたいと思えば、運転に関しては、ほとんど「自動性」の世界で処理できるようになっていなければならない。強迫症者は、こうして景色を眺めるどころではなく、運転するだけで精一杯になって力んでいる新米ドライバーのようなものだ。

この例は、技術的スキルを前提としたものである。では、社会的スキルに関してはどうであろうか。現代社会のもう一つの特徴は、地域社会と家庭の崩壊であるように思われる。デュルケイムの用語を用いれば、アノミー (anomie) 状況ということになる⁶⁰⁾。確かに、個々の家族の家庭環境に関してはよい場合もある。しかし、総体的に見れば、現実には出生率の低下と核家族化が進んでおり、たとえば子供は、家庭の中で親以外の大人や他人と接触する機会をあまり持っていない。社会的状況があまりにも親子の関係に限定されるため、溺愛状態に陥ってしまうこともある。一般的に言って、教育のためには、個人、家庭、社会が全体として関連しながら安定している状況が望ましい。もちろん、ここで

いう教育とは、単に学校での教育を指しているのではないが。その教育を行うべき家庭と社会に、今日、一貫性と安定した状況を期待することはできないように思われる⁶¹⁾。それ故、それらが社会的スキルを教える能力を持っているかどうかは疑わしい。そのような環境のもとで、先ほど示した知性偏重の傾向が作用してくる。人は、社会的現実に対応して成長する前に、知的労作の努力をするように方向付けられているのではないか。哀れなことに、むしろ、その面で成功した人が優秀な人物と呼ばれることになってしまう。例の校長も、そうした優秀な人物であった。「ほとんど友達のいない孤独な幼年期に続いて、教育システムの中で際だつために必死になって勉強し、そして、ある程度成功を修めることになる青年期がやってきた⁶²⁾」のである。おそらく彼もそうであったのであろうが、こうした強迫症者は、メイヨウも示しているように、ちょっとした会話や交際を普通に行うことが難しい。それ自体が、精一杯努力する必要のあるものなのだ。言い換えれば、彼らは、社会的スキルに欠けている。だからあの校長も、幼年期の段階ですでに友達がいなかったのかも知れない。また逆に、友達がいないために社会的スキルを発達させる機会に恵まれず、強迫的性格になってしまったというべきなのであろうか。いずれにしても、彼が強迫的であったことは事実であり、おそらくその背後には、発端は定かではないが、この種の悪循環が存在していたことであろう。

強迫症者を観察して、ジャネは言う、「彼らは、何も実践的なことに関心がなかった。時には、幼児期からこのかたずっと、まったく驚くほど不器用であったりする。そうした患者の家族は、彼が、これまで決して実際的になったことがなく、現に自分が置かれている状況を考慮できず、何事であろうと事をうまくまとめ、やり通すことを知らなかった、といつも断言していた⁶³⁾」と。これを、メイヨウの言葉を用いていえば、強迫症者は、技術的スキルや社会的スキルを欠いているのである。それ故、現実に対応して成長することができず、思考に逃避したり、より次

元の低い現象を示してくるのだ。しかしこのことを、その人自身の個人的な問題だとして押し付けておいて済むものであろうか。それ自体は、一方において、現代社会に見られる地域社会と家庭の崩壊に、そして他方、学校のみならず社会全般に見られる知性偏重主義的傾向に、かなりの程度起因しているように思われる。その意味でも、これらの点は、メイヨウのいうように社会の問題であり、最も広い意味での教育の問題なのである。このような認識のもと、メイヨウの研究を引き継いだレスリスバーガーは、彼の示した社会的スキルの教育に専念して行くことになる。実際、彼の論文集 *Man-in-Organization* をみれば、社会的スキルにかかわるコミュニケーションの問題を扱った論文がいかに多いことが分かるであろう⁶⁴⁾。

注

- 1) cf. Janet, P., *Les Névroses*, pp. 16-17.
- 2) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 66.
- 3) cf. Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, p. xi.
- 4) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 85.
- 5) *Ibid.*, pp. 85-86; Janet, P., *Les Névroses*, p. 17.
- 6) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, pp. 73-74.
- 7) cf. *Ibid.*, p. 85.
- 8) cf. Janet, P., *Les Névroses*, pp. 16-26. なお、より詳細には次の著作を参考にしていきたい。cf. Ditto., *Les Obsessions*, vol. 1, pp. 4-54.
- 9) Janet, P., *Les Névroses*, p. 18.
- 10) *Ibid.*, p. 21.
- 11) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, pp. 92-93. なお、こうした強迫症的な人々のより詳しい記述は、同書の第一章「精神病理学と社会学的研究」に見られる。特にその12頁から13頁にかけての部分で、彼らの特徴が5点にまとめられている。cf. *Ibid.*, p. 1-23.

- 12) *Ibid.*, pp. 93-94.
- 13) *Ibid.*, p. 94.
- 14) *Idem.*
- 15) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 5.
- 16) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 93.
- 17) "Appendix : Frightened People" in *Psychology of Pierre Janet*.
- 18) cf. *Ibid.*, pp. 115-123.
- 19) *Ibid.*, p. 120.
- 20) 以下に示す概略的な内容は、メイヨウが第三のタイプの事例として二つあげた内の一つである。cf. *Ibid.*, pp. 121-123.
- 21) ジャネは、ヒステリー症と精神衰弱を対比するに当たって、*Les Névroses* の最初の章で、ヒステリー症者のもつ固着観念と精神衰弱者のもつ強迫観念を引合いに出している。cf. Janet, P., *Les Névroses*, pp. 3-38.
- 22) *Ibid.*, p. 35.
- 23) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 75.
- 24) *Idem.*
- 25) *Ibid.*, p. 76.
- 26) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 7.
- 27) *Ibid.*, p. 6.
- 28) Janet, P., *Psychological Healing*, Translated by Eden and Cedar Paul, Arno Press, Inc., vol. 1, p. 275.
- 29) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 100.
- 30) *Idem.*
- 31) こうした「今ここで」の感覚の欠如に関連して、ジャネは、「既視 (déjà vu) 」という体験を提示する。彼によれば、この体験の本質は、「過去の確信よりも、はるかに現在の否定である。」cf. Janet, P., *Les Névroses*, p. 356.
- 32) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 79.
- 33) *Ibid.*, p. 88.

- 34) *Ibid.*, p. 99.
- 35) Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, p. 697.
- 36) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, pp.4-5. なお、ここに示されている内容は、参考にした箇所が明示されてはいないが、レスリスバーガーがジヤネの述べている点を要約したものである。
- 37) Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, p. 40.
- 38) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 100.
- 39) *Ibid.*, p. 87.
- 40) Barnard, C. I., *The Functions of the Executive*, Harvard University Press, 1938 (山本安次郎、田杉競、飯野春樹訳『新訳 経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年), p. 12.
- 41) Janet, P., *Les Névroses*, p. 255.
- 42) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 89.
- 43) Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 7.
- 44) cf. *Ibid.*, pp. 7-18.
- 45) cf. *Ibid.*, pp. 9-10.
- 46) cf. Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 69 ; Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, pp. xi-xii.
- 47) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 70.
- 48) cf. Trahair, R. C. S., *op. cit.*, pp. 83-85.
- 49) このシリーズは、第一巻が1941年に、そしてその後1959年の第五巻まで、エール大学出版部から公にされている。
- 50) cf. Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, pp. 54-57.
- 51) cf. Homans, G. C., *The Human Group*, Harcourt, Brace & Co., 1950 (馬場明男、早川浩一訳『ヒューマン・グループ』誠信書房、1968年)。
- 52) cf. Homans, G. C., *Coming to my Senses*, pp. 153-166.
- 53) cf. *Ibid.* p. 153 ; Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, pp. 29-31. なお、ホマンズにとっては、デュルケイムの社会学的研究よりも文化人類学的研

究の方に関心が引かれたようだ。

- 54) レスリスバーガーは、メイヨウの著作 *The Human Problems of an Industrial Civilization* に“On Elton Mayo”と題した「序」を寄せて、そこで「問題は、欲深な社会の病に関するものではない。それは、病める社会の欲深さに関するものだ」というメイヨウの言葉を引用している。この言葉は、メイヨウが、病める社会という認識をしていたことを端的に表現するものといつてよかろう。この序は、その後 *Man-in-Organization* に収録されている。cf. Roethlisberger, F. J., *Man-in-Organization*, p. 227-233.
- 55) すでに、三部作の二冊については言及してきている。残る一冊は、*The Political Problems of an Industrial Civilization*, Division of Research, Harvard Business School, 1947である。これは、非常に短い著作である。ここでは、無知に基づいて人々を強迫状況に陥れ、その心理状況を利用して社会を統制しようとする当時のソヴィエト連邦が批判の対象の一つとなっている。レスリスバーガーの示す「誤った二分法」に関連させてみれば、そこに、特に「安全対危険」の二分法が作用しているといつてよかろう。
- 56) Janet, P., *Les Obsessions*, vol. 1, p. xi
- 57) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 107.
- 58) *Ibid.*, p. 99.
- 59) *Ibid.*, p. 79.
- 60) cf. Durkheim, É., *Le Suicide : Étude de sociologie*, Presses Universitaires des France, 1897 (宮島喬訳「自殺論」『デュルケーム ジンメル』中央公論社、1980年)
- 61) メイヨウは、「仕事とメンタルヘルス」と題した講演で、アダムス (Brooks Adams) の「社会は、もはや堅い絆の家族を当てにすることはできない」という認識に注目し、失業者の中にはその帰結である「うつろいやすい個人 (volatilized individuals)」が多く見られるとしている。cf. Trahair, R. C. S., *op. cit.*, p. 287.
- 62) Mayo, G. E., *Psychology of Pierre Janet*, p. 123.

63) Janet, P., *Les Névroses*, p. 357.

64) *Man-in-Organization* に掲載されている論文を見ると、1950年代までの論文は、ほとんどのものが、大なり小なりこの問題にかかわっている。

VI. 結言

これまで見てきたように、1927年にレスリスバーガーは、ハーバード大学において、メイヨウのもとで学生にカウンセリングをすることから研究活動を始めている。そして28年からは、あの有名なホーソン調査にも参加することになった。この調査は、彼の立場からみれば、そのカウンセリング活動の応用であったといってもよい。そして39年には、調査全体にわたる報告書 *Management and the Worker* も公にしている。ここでの検討範囲を越えるが、47年になると、メイヨウがハーバード・ビジネス・スクールを退官する。レスリスバーガーは、その後もハーバード大学で研究を進め、人間関係論、インターパーソナル・コミュニケーション (Interpersonal Communications)、組織行動論 (Organizational Behavior)、などといった研究領域を開拓して行く。これらの多くは、基本的に社会的スキルの教育にかかわるものであった。研究上このような展開をみせるレスリスバーガーの背後には、前提として、ジャネの人間に関する理解が存在していたといえる。それも、メイヨウによる解釈を介したものであった。事実、社会的スキルを重要視する立場は、ジャネを基礎に置くメイヨウから受け継いだものである。

そのメイヨウは、ジャネが主張している人間理解のあり方を、1927年前後のハーバード大学の学問的雰囲気をも反映させる形で、基本的には生理学者のヘンダーソンの示す「均衡」仮説に基づいて把握している。同時に彼は、ジャネの理論が、他の研究者からも支持され得るものだとの立場に立ち、そうした人々のアイディアを、この「均衡」の概念を中核に据えることによって結合するとともに、その視点からジャネの理論を

読み直すことを通して、彼独自のジャネの理論に関する理解を示している。それは、ジャネが対象とした人間の範囲をはるかに越えて、生命一般にも適用可能なものであった。

いずれにしても、メイヨウとレスリスバーガーは、基本的にジャネの理論に基づいて人間を理解する。その人間の示す一種の精神的な機能低下の現象、あるいは精神的抑鬱の一形態が精神衰弱である。それは、しばしば強迫症という形をとって現れてくる。彼らが関心を持ったのは、多方面にわたる豊かなジャネの業績の中でも、特にこの「強迫症」に関する部分であった。レスリスバーガーは、メイヨウの指導のもとでカウンセリングをしていたが、対象となった学生の多くは、まさにこうした強迫症者あるいは悩むタイプの人々なのである。レスリスバーガーは、これらの人々について、ジャネの所説に基づいた研究を進めてゆく。そして、その最初の成果が、論文“Obsessive Thinking”であった。ここでは、強迫症者に特徴的に見られる思考の性質や形態に焦点が当てられている。彼は、それを「誤った二分法」と呼んだ。

この立場から、メイヨウに会うまでのレスリスバーガー自身をもう一度見てみよう。レスリスバーガーは、学校に通うようになるまで、英語を話すことはできなかった。フランス語を使う母方の家族の中で育ったからだ。もちろんその家庭環境は、フランス文化に基礎を置いたものであった。その意味で、子供の頃の彼は、アメリカ人というには程遠い存在であったといえる。このようなことから、親しい友達もできなかったのではないか。また、すでに見てきたように、家庭環境も、彼にとって心地よいものではなかった。むしろ彼は、そこから逃げだしたいと思っていたほどである。そうした状況で育ったレスリスバーガーは、自意識が強く、学校へ行くようになってからも、皆と同じことをするのに抵抗を感じたりして、なかなか親しい友人はできなかったようだ。この点に関しては、叔父の親切が逆に作用していた感じもある。叔父の援助で、家庭の経済状態に不相应な学校に通っていたため、裕福な友人の

家に気軽に遊びに行くこともできなかったという。こうして彼は、子供ながらも、社会的距離の存在を実感することにもなっていく。すでに述べたように、このように孤立した状況で彼の気を引いたのは、勉強であった。まさにこのことは、あの校長とよく似た状況とってよかろう。そして、この荒涼とした心理状況の中で例外的に彼を孤立から救ってくれたのは、病気で入院した時に恋心をいだいた看護婦さんと、闘病生活を共にした同年代の患者ぐらいであった。特に後者とは、その後も一生付き合っていくことになる。

幸いなことに、孤立していたレスリスバーガーではあるが、ドイツ系の真面目な義父に好感を持つようになる。そして、義父ともども、次第にこつこつと努力して成功を求めるアメリカ人となってゆく。そんな中で、工学で成功しようと思ってコロンビア大学に入学する。しかし大学は、以前よりも一層彼を惨めにする世界であった。授業は大教室で行われ、教授とは、ほとんど知り合うこともできない。つまり彼は、それまで以上に孤立してしまっただけである。その一方で彼は、理論を知的に理解することはできたが、実験などの操作は上手にできなかった。そのため、工学が自分には適していないものと思いだす。そして、次第に経済学や社会的な問題へと関心が移っていった。コロンビア大学からMITへの移動は、その具体的な現れとってよい。それでも、大学を卒業して、一応化学技師として勤めることになる。しかし、やはりそれも失敗であった。彼は、技術的スキルが身につけておらず、スキル豊かな先輩の仕事ぶりを見て、失敗の感じに支配されることになってしまった。おそらく、より適切に言えば、普通の人の場合、次第にそれを身につけてゆくのであるが、彼は、その前に、ただ身につけていないこと自体を重大な問題として認識してしまい、結局失敗の感覚を持つようになってしまったのであろう。彼はその仕事をあきらめ、次に本の通信販売員をし、そしてハーバード大学の哲学研究科へと移っていく。彼にすれば、この転身は、成功を求めるための変更であったのかも知れない。しかし、あ

る意味でそれは、知的世界への逃避ともいえる。ところが、知的世界でも成功を手にすることはできなかった。ホワイトヘッドの予想以上の厳格さと、デカルトに関して読まなければならない莫大な資料は、一層彼を、絶望の縁へと追いやってゆくものとなる。この絶望的状况で、彼はメイヨウに会うのである。

これまでのことからみて、若い頃のレスリスバーガーは、社会的スキルも技術的スキルも欠いていた。その一方で、知的には優秀であったといえよう。もちろん、社会的スキルの欠如から、友人のいない孤独な人物でもあった。メイヨウの前に立った彼は、まさに強迫症に陥っていたのである。こうした心理状況下で、彼は、学生に対してカウンセリングを行うことになる。それも、なんと強迫症に陥っている学生に対してである。その時彼は、おそらく、それらの学生を前にして、昨日までの自分を見ているような思いがしたに違いない。彼が、わざわざ強迫症者は基本的に正常な人間だとしているのも、その思いがあったからではなかろうか。精神病理学的な評価は別にして、もし彼らを正常と見なければ、自分自身が異常な人間であることになってしまう。レスリスバーガーの人間関係論には、その基礎において、こうした彼自身の苦々しい経験と自己認識が作用しているものと考えられる。その後の彼は、このカウンセリング活動で次第に成功をおさめてゆく。それに従って、彼自身も成長していったのであろう。教え子のサーフェイス (James R. Surface) は、「おそらく最も重要な点は、彼らがその人物に好感を持っていたことでしょう²⁾」と述べて、レスリスバーガーが、多くの人と気軽に会話を交していたことを示している。このことから、後のレスリスバーガーは、かなり高度な社会的スキルを発揮していたものと思われる。その意味で、彼の人間関係論の最大の成果、あるいはその有効性の最良の証拠は、彼自身なのかも知れない。

翻って、われわれの日常生活に目を投じてみよう。強迫症者は、あの校長やレスリスバーガーだけであろうか。地域社会の崩壊と核家族化が

進む現代社会では、むしろ、そうした人々がかなり多くいるように思われる。たとえば、寡黙でなかなか自分を表現することはしないけれども自尊心の強い人、逆に、レスリスバーガーの友人リー (Irving J. Lee) が石頭さん (Jon Stone) と名付けた³⁾、会議で反対者に集注放火を浴びせる、メイヨウの言葉でいえば「ガンマン」のような人、これらの人々は、われわれの周りに多くいるとってよかろう。自分自身がそうであるかも知れない。たとえ強迫症に陥っていなくとも、時には、過度のストレスなどで同様の現象を示していることもあろう。

経営学的に見て、こうした人々の存在やこのような心理状況の問題点は、一方ではモラルの低下という形で現われ⁴⁾、他方、コミュニケーションの欠如とそれに続いて生じる感情的な対立の醸成という形をとることが考えられよう。もちろん、対立を旨とする理論もある。ただ理論として見る限り、それはそれでよい。しかし、その理論を現実化しようとする時に、対立が感情的にならないといえるのであろうか。また、対立する両者が、強迫症的にならないと保証できるのであろうか。それらは、どのようにして確保されるのであろうか。これらの点に対応するためにも、また、一般に経営と管理が追求している協働のためにも、これまで示してきた点の認識とそれらへの対応と解決が必要とされるように思われる。人間関係論を過去のものとしてきた感じのある経営学であるが、その発展過程で、果してこれらの点を解決してきたのであろうか。それとも、これらは、取るに足らない些細な問題なのであろうか。経営学は、これらの問題を解決してきたとは思えない。さりとして、日常経験から見る限り、それが些細なことのようにも思われぬ。むしろ多くの管理者にとって、それらは、最も現実的で差し迫った「今ここでの」大問題ではなかろうか。

注

1) 以下の記述は、基本的にレスリスバーガーの伝記の第2章に従っている。cf.

Roethlisberger, F. J., *The Elusive Phenomena*, pp. 11-28. なお、坂井正廣稿「レスリスバーガー研究序説(1)——『この把えがたい現象』を中心として——」『青山経営論集』第15巻、第2・3合併号、1980年、杉山三七男稿「レスリスバーガーに関する覚え書——『この把えがたい現象』を中心として——」『学生懸賞論文集』第10号、青山学院大学経営学会、1981年も参照されたい。

2) Lombard, G. F. F. (ed.), *op. cit.* (邦訳 I、37頁).

3) cf. Lee, I. J., *How to Talk with People: A Program for Preventing Troubles That Come When People Talk Together*, Harper & Brothers, 1952, pp. 43-59.

4) メイヨウは、モラルの低下を実在機能が低下した状況として見ている。cf. Mayo, G. E., *The Human Problems of an Industrial Civilization* (邦訳、114-122頁).